



Title	土器型式非在論 : 土器群構成分析法のすすめ (2)
Author(s)	小杉, 康; Kosugi, yasushi
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 3, 1-35
Issue Date	2024-02-22
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/109186">https://doi.org/10.14943/109186</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/91235">https://hdl.handle.net/2115/91235</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_3_kosugi_1-35.pdf



## 土器型式非在論

### —土器群構成分析法のすすめ(2)—

小杉 康

**要旨:** 二枚橋式土器は本州島最北端の弥生文化の最初期の土器型式の一つとして設定された。類似した土器群の存在は津軽海峡を挟んで隣接する北海道島南西部地方でも知られている。それらを二枚橋式土器であると評価することは、弥生文化の空間的な広がり北海道島にまで広げることにもなりかねないために、多くの研究者は躊躇した態度をとってきた。このような「狭間の土器群/端境の土器群」が提起する問題は、そもそも土器型式とは何か、どのようにして認識できるのか、どのように変化するのかといった先史土器研究における根本的な問題の核心へとつながる。本稿では二枚橋式土器を事例にしてこれらの問題群に取り組み、土器型式編年の土器型式が特定の時間的・地理的な単位としては解体され、それを構成するタイプが均質な時間・空間枠で区切られた各グリッドの中に再編成されるべきであることを論じる。

#### はじめに — 「北海道(島)」という認識 —

最終氷期が終わり後氷期にいたると、ユーラシア大陸から延びる古サハリン=北海道半島は分離して、周囲が海によって囲まれるサハリン島と北海道島、及び周辺の島嶼へと変化する。氷期においても島であった古日本島は、本州島、四国島、九州島、及び周辺の島嶼へと移り変わり、今日的な地形環境である日本列島が姿をあらわす。古サハリン=北海道半島と古日本島とであった最終氷期の間は、人類史としては旧石器文化が展開する。現在の北海道島と本州島以南にあたる地域では、かなり異なった様相の石器文化が展開する。日本列島が形成された後、北海道島と本州島、四国島、九州島、及び周辺の島嶼においては、縄文文化として一括りされる考古文化となり(南西諸島と伊豆小笠原諸島とはそれぞれどこまでが縄文文化の広がりに含まれるかが問題であるが)(水ノ江 2020)、その内部の各地では地域色ある縄文文化が相互に関連しながら展開した、と考えられている。朝鮮半島から、九州島をはじめとして、本州島、四国島に水稻耕作の生業方式が伝わり取り入れられると、日本考古学ではそれを境に弥生文化として「時代区分」する。稲作へと生業が変化しなかった南西諸島や北海道島では、その後長らく九州・四国・本州各島を中心として展開した弥生文化、それに続く古墳文化とはかなり様相を異にした考古文化が展開することになる。北海道島にて、その間に展開した考古文化が「続縄文文化」や「擦文文化」、「オホーツク文化」である。そして考古文化としては「アイヌ文化期」へと続き、さらに文献的・民族誌的に記録される「アイヌ文化」へと続いてゆく。

このように北海道島で展開した種々の考古文化あるいは人類文化のうち、縄文文化の時期が最も本州島以南との類似性が高まり、それ以前の旧石器文化の時期、それに続く「続縄文文化」以降の時期においては、本州島以南で展開する考古文化あるいは人類文化と互いに際立った違いを見せていた、と理解されている。

縄文文化以降の様相を、太平洋戦争前の 1933 年といった早い時期において、山内清男は次のように説明している。

「縄紋土器の文化圏は斯くの如くして内地の文化圏と、北海道の文化圏に分裂してしまったのである。(…中略…)この文化圏の対立は永く続き、北海道には独特の変遷があった。爾後石器、土器、竪穴住居は漸次廃止された。そして我々は近世に至ってアイヌがこの文化圏の主人公であることを知ったのである。」(山内 1932・33 [1967 再録:35])

同書の『補注付新版』(1939 年)の中で、山内は分裂後の北海道の最初の考古文化として、後に「続縄文文化」あるいは「続縄文時代」と呼ばれることになるものを次のように述べている。

「北海道では縄紋式以降にも縄紋の多い土器の型式が続いて居る。この式を近年私は続縄紋式と云って居り、若干の型式に細分し得る様である。」(山内 1939 [1967 再録:42-43])

今日の理解につながるような先見性のある発言であるが、注意しておきたい点は、「北海道」といった行政区画とも一致することにも大きな原因はあるが、一方で北海道島を有意味な1つの地理的あるいは文化的な単位として、その後の研究者の脳裏に固定させてしまったことである。現在の埋蔵文化財行政の成果が多くの面で行政区画に依存していることは紛れもない事実であり、そのこと自体に特に問題がある訳ではない。それらの成果を研究者が使用する際に、いかにその区画(枠)を取り扱うことができるかが重要である。特に「北海道」の場合、海(津軽海峡)で隣県と区切られることによって、またブラキストン線に代表されるような動物や植物の分布境界が県境と重なることによって、その単位性が所与のものであるかのごとくに了解されてしまっている点である。

地理的・生物分布的境界線に一致している県境に接する北海道島南西部(道南)地方を取り扱う際には、特に気を付けなければならないが、さらに「縄文文化(時代)」から「続縄文文化(時代)」への移行期を扱うのであるならばなおさらのこと、無自覚のうちに「北海道」を有意味な地理的単位として取り扱うことには特段の注意が必要である。単に「島」の字を付けて表記すれば済まされる問題ではない。

さて、そのような北海道島の「続縄文文化(時代)」の土器型式編年研究においては、「時代」の移行期にあたり、かつ「県境」に接する、あるいは近接する位置にある道南地方の土器型式群を取り扱う際に、上記のような地域認識の潜在的な問題性が研究史上に色濃く陰を落としている点を指摘できる。

○

北海道大学考古学研究室では 2012 年から礼文華遺跡(北海道虻田郡豊浦町所在)の第 3 次発掘調査を開始し、2023 年の 12 シーズンを数えて終了した<sup>注1</sup>。現在、発掘調査報告書の作成中であるが、当遺跡出土土器群をとりまく問題群の整理を行うことが本稿執筆の動機でもある。すでに同じ目的で、同時期(続縄文期前葉)における他地域の遺跡出土土器群を分析対象として「土器群構成分析法」<sup>注2</sup>の紹介を行っているが、それとはやや角度を異にした視点・手続きによる土器群分析の試みでもある。

## I. 二枚橋問題

### (1) 土器型式変遷観

土器型式編年上の土器型式は時間的・地理的な単位として設定されている(山内 1932・33 [1967 再録:2])。ある地域の土器型式の大方の変遷順序について、研究者間でほぼ同じ認識がもてたとしても、時間的に前後する土器型式間の境界線をどこに定めるかは、各人において微妙な違いがあり、しばしば論争の火種となっ

ている。これは土器型式とはどのようなものであり、またどのように次の土器型式へと変遷するのかといった、基本的な考え方の違いによるものと考えられる。それを土器型式変遷観の違いといってもよい。

土器型式はある画期をもって一斉に変化するものである、と考える者。その場合、時間的に前後する土器型式を区分する何らかの特徴(メルクマール)が存在し、考古学者はそれを見出すことによって両者を明確に判別できると考えられている。出土状態において、問題とする先後する土器型式にそれぞれ属する資料群が、例えば下層から上層にかけて一方は漸減し、他方が漸増した場合であっても、それは埋没の過程および埋没中において、包含される資料にある程度の埋没順序の逆転(掘り上げ土の再堆積などによる)や上下移動(土壌化作用などに伴う)が生じたための現象であって、本来の製作・使用時期にあつて両者は時間的に明確に区分される、とする立場である。

一方、事物の消失と出現とは漸移的に変化するものであり、土器型式においても例外ではない、と考える者。1つの土器型式を構成する複数のタイプ、あるいは1つのタイプを構成する複数の要素、これらはすべてが同時に現れたり変化したり、また消えたりするものではなくて、それぞれには遅速の差があり、それぞれの組み合わせは随時変化している、と考えられている。アメリカ考古学の研究事例から紹介された「セリエーション」の考え方(朽木 2023:60)などはこの代表といえるだろう。先に例として挙げた出土状態における漸減・漸増の現象などは、埋没時・埋没中の浮動的な状況を考慮することなくとも説明することが可能になる。この考え方を推し進めると、タイプといった類型概念を設定することにさえ否定的になり、結果として構成要素(属性)の出現頻度の推移のみが問題とされることになる。ちなみに、アメリカ考古学における研究方法の属性分析とはこのレベルの手続きのことである。タイプの設定に計測的なデータを使用したり、また一旦設定したタイプに属する資料群の諸特徴(属性)を計量したり数量化したりして比較検討することを「属性分析」と呼ぶこともあるようだが、先の意味での属性分析ではなくて、それは基本的には類型概念を用いた研究である。

筆者がこれまでに実施してきた土器研究法は、1遺跡あるいは1文化層から出土した一群の土器を、時間的なまとまりがあると仮定して土器群として捉え、それが複数のタイプによって構成されている(土器群構成)と考えるものであった(小杉 2017:135)。同じ土器群構成をもった土器群が、一定の地理的な広がりをもって確認される場合、その土器群構成の内容が土器型式の内容となる訳であるが、実際にはそこに含まれる各土器群の土器群構成における遺跡(文化層)ごとの微妙なニュアンスは捨象され、ある程度抽象化された内容をもって、換言すれば最大公約数的な内容をもって、土器型式の記述的な定義内容となってくるはずである。話を戻すと、筆者は方法としてはタイプ認識が重要であると考えているが、1つの土器群を構成するそれらのタイプには「発現様態」や「残存様態」などを認めているので、先の土器型式の変遷観としては、後者の漸次変化する考え方に近い。(ある土器を特定の土器型式であるといった判定はどのようにして成立するのであろうか。これについては少し進んでから考察する。)

## (2) 二枚橋式土器問題

道南地方から北海道島中央部(道央)地方西部にかけての続縄文土器の前半の土器型式群、すなわち恵山式土器群の取り扱い方においては、時間的に前後する土器型式間の境界線をどこに定めるか、といった上記のような微調整のレベルの論争とは異なる次元の問題(混乱)が生じている。

恵山式土器群が大まかに4段階の変遷をもって推移することに関しては、現在、研究者間での大方の理解は得られている(例;工藤 2004:153)。恵山式土器群の各土器型式(細別)名称は、以前はアルファベット表記の事例もあったが、現在では算用数字かローマ数字かの違いはあるが、「数字」を付して呼称・表記されること

が多い。しかし、研究者間でその数字の振り方にかなりの違いが見られる。そのような齟齬の事例は、他地域・他時期の土器型式編年研究においても見られないことではないが、恵山式土器群の場合は、その始まりをどこにするのか、すなわち恵山式土器群の最初に「二枚橋式土器」を含めるのか否か、あるいは「二枚橋式併行期の土器群」を含めるのか否かによって、細別(土器型式)名称の数字の付け方に順次ズレが生じるような事態になっている。

二枚橋式土器は1970年に須藤隆によって提唱された弥生土器に属する本州最北端域の土器型式であり、同地方の弥生土器の最初頭にあたる砂沢式土器に続く編年的位置を与えられている(須藤 1970)。道南地方においては続縄文期初頭期の土器型式を「二枚橋式土器」とすることは、北海道島の一部であってもその時期には弥生文化の分布圏に属していた、という評価になるのであろうか。あるいは、「弥生時代(文化)」が第一義的には水稻耕作の開始をもって定義されるのであれば(佐原 1975)、土器型式のいかんには関わらず、すなわち同じ土器型式の分布圏であっても、水稻耕作を開始・実施している範囲までが「弥生時代(文化)」であり、そうでない範囲は「続縄文時代(文化)」である、といった判断になるのか。ここではまず道南地方における当該期土器群の代表的な取り扱い方を整理しておく。

「恵山文化」を早期・前期・中期・後期・晩期の5期に区分する菊池徹夫は、その早期に対して「さまざまな型式、とりわけ南の大洞式系と北のヌサマイ式系とが複雑に影響し合い、移入品たる精製土器と地元産で縄文の目立つ半精製、ないし粗製土器が融合しつつ、やがてたとえば有珠善光寺貝塚第三貝塚のような土器群が生み出されていく」、「こうしてアヨロⅡ群の1類a土器が成立する」と説明し、「これらは下北半島の二枚橋式ないしその併行型式とみてよいであろう」(菊池 1984:64-65 傍点引用者)という評価を与えている。微妙な言い回しであり、「二枚橋式」としているのか、それとは土器型式としては別物の「併行型式」としているのかの判断に苦慮する。掲載された編年表(菊池 1984:75 第5表)の「土器型式」の欄には「早期」として「恵山Ⅱ」「同Ⅱ」の表記が記され、これに併行する位置にアヨロ遺跡の「1類a」「同b」が示されている。

「恵山式土器編年の枠組」を4段階に分ける石本省三は、その第1期に対して「恵山式土器の成立を二枚橋式に類似した資料をもって始まる」と述べている(石本 1984:324 傍点引用者)。「二枚橋式土器である」とは断定していない。「類似した資料」に対する個別の土器型式名は示されず、「恵山式土器第1期」の表記を用いている。該当する資料としては「若干時間幅があるものが混在している可能性」を指摘しながらも、「礼文華遺跡(峰山、1968年)」などを挙げている。しかし、石本の恵山式土器の各期が、他の研究者によって土器型式名として「恵山1式」「同2式」「同3式」「同4式」と呼び変えられて理解された面も多かったと思われる。

「続縄文時代」を4期(I・II・III・IV期)に区分し、「弥生時代に相当する時期」をそのうちの「前期(第I・II期)」とする工藤研治は、道南地方における「続縄文時代」の始まりである「第1期前半」に「砂沢式相当の土器」、次いで「二枚橋式相当の土器」をあてている。同時に「道南ではこの段階で二枚橋式類似の型式が成立する」といった表現もしており、前出の菊池と同様に、明確な判断を避けているようである(工藤 2004:153 傍点引用者)。問題の恵山式土器については、「この二枚橋式相当の土器をもって恵山式土器の始まり」とする点は菊池・石本・高橋(後出)の判断と同じであり、また恵山式を「4段階の変遷をたどる」としている点は、その内容と共に石本の見解を引き継いでいるといえる。このように工藤の「第1期前半」「二枚橋式相当の土器」の段階は恵山式土器の第1段階にあたる訳だが、該当する資料としては「上磯町下添山出土の下添山式」や「豊浦町礼文華貝塚出土資料」、「伊達市有珠善光寺遺跡Ⅲ層出土資料」などが挙げられている。

### (3) 二枚橋式土器の細分

高橋正勝は、1980年のアヨロ遺跡の発掘報告書において「II群土器(恵山式土器)」を3群に分類したうちの「アヨロ1類土器」について、「二枚橋式土器の主な文様要素である変形工字文・短刻線」をもつ1類a土器と、その無い1類b土器とに細分する(高橋編1980)。その後資料報告された旧上磯町下添山遺跡の出土土器(吉崎1982)を標識資料として、二枚橋式土器の前半に「下添山式土器」を並行させ、後半に「アヨロ1式土器」を並行させる(高橋1984)。アヨロ1式土器とは、先に設定したアヨロ1類a土器のうちから「変形工字文をもつより古いタイプ」を下添山式土器に移し、同じくアヨロ1類b土器のうちの「幅広い無文の頸部をもつより新しいタイプ」をアヨロ2類a土器へ移し、その残りを合わせて(すなわちアヨロ1類土器からより古い一群とより新しい一群とを取り除くことで)「アヨロ1式土器」として改めて設定したものである。すなわちこの段階で二枚橋式土器が新旧2細分されることが示唆されたことになる。なお、該当資料数は少ないが、アヨロ遺跡にも「下添山式土器」(の段階=二枚橋式(古)併行)が存在することになる。

また、高橋は下添山式土器について「最も初期の恵山式土器」といった表現をしているので、下添山式土器とアヨロ1式土器とは時間的に継起して、編年的には二枚橋式(古)・同(新)と併行関係にありながらも、それとはそれぞれ別の土器型式であるといった認識をもっていることがわかる。アヨロ分類の土器すなわちII群の2類a・2類b・3類a・3類b土器は、それぞれアヨロ2a式・2b式・3a式・3b式土器と呼びかえられる。恵山式土器の細分型式(細別)として最初に位置づけられる下添山式土器は、その分布圏について「道南部に分布が限られ石狩地方には発見されない」(高橋1984:366)と述べられるが、続くアヨロ各式土器の分布圏については特に言及されることがなかった。分布圏が提示されない以上は、「アヨロ〇式土器」と呼称しても、実質的にはアヨロ遺跡出土土器群の分類であるII群土器の「アヨロ〇類a・b土器」とかわることはなく、そのままでは分布に関する情報を含意することはできない。そのためにか、他の研究者にあっては「アヨロ」を「恵山」に置き換えて、「恵山1式」「同2a式」「同2b式」「同3a式」「同3b式」と呼びかえる機会が多くなったことが推察される。「恵山」の名を冠していなくとも下添山式土器は広義の恵山式土器(あるいは恵山式土器群)に含められている点、また二枚橋式土器を前後に2細分している点を見逃さない。よって、他の研究者によってアヨロ1式土器が「恵山1式土器」と呼びかえられる場合があったとしても、それは編年的には二枚橋式土器の後半に併行することになってしまう点に注意しておきたい。

「恵山式の編年」について、上述の石本らの「4型式細分を基本的に踏襲」しながらも、「北海道出土の二枚橋式は、『恵山〜式』とよびかえない」、すなわちそれを「二枚橋式土器」と呼称するのは高瀬克範である(高瀬1998:21)。ただし、「恵山式土器群のうちもっとも古く位置づけられる二枚橋式は、新旧に段階区分できる」と述べており、下北半島の二枚橋遺跡(大畑町)と瀬野遺跡(むつ市)との出土土器における器種組成の違いや、調整や文様の簡略化・粗雑化などに着目して、「二枚橋遺跡が古段階に、瀬野遺跡が新段階に位置づけられる」としたうえで、「北海道の二枚橋式は瀬野遺跡に類似しており、新段階になってから東北北部から波及してきたもの」と捉えている(高瀬1998:22)<sup>註3</sup>。ゆえに、「二枚橋式期を恵山式土器群の『成立期』」とし、この点は上記四者(菊池・石本・工藤・高橋)と同じであるが、それは二枚橋式土器の新段階にあたるために、東北北部において続く宇鉄II式土器、次の田舎館式に対して、北海道島側の併行する土器型式をそれぞれ「恵山1式」「恵山2式」とし、さらに「恵山3式」が続くとしている。

高瀬のこの見解は2005年の論文で一部変更される。「下北半島では口縁部無文帯深鉢は二枚橋式直後から急速に衰退する」、一方で「北海道南部・中央部では二枚橋新段階から恵山1式まで確実に残存する(例:小幌洞窟など)」のであり、「下北半島と北海道島南部において上記3者(引用者補注:①口縁部無文帯深鉢、②ローカルな組列の粗製土器、③大洞A'~二枚橋式の精製土器もしくはその系譜下にある土器の3者)全体に

地域性が生じてくるのは、二枚橋新段階からではなく恵山 1 式からである」ことを根拠にして、「北海道島南部を二枚橋式新段階の分布域とし、恵山 1 式から恵山式土器群に含める」(高瀬 2005:65)ことが示される<sup>注4</sup>。

大坂拓は「二枚橋式土器」を設定した須藤に対して「瀬野遺跡出土土器群の一部を二枚橋式とするのか後続する土器型式とするのか一定しない」と批判し、「二枚橋式の型式内容の理解が食い違う要因となった」(大坂 2007:56)と指摘している。須藤が『瀬野報告』(伊東・須藤編 1982;以下同様に略記)において、先に二枚橋式土器の標式資料とした二枚橋遺跡出土土器と瀬野遺跡出土土器とを「包括する形で二枚橋式土器の型式内容を再定義した」ことに対して、大坂は二枚橋遺跡出土土器群・瀬野遺跡西地区出土土器群(A 群)と瀬野遺跡竪穴住居址覆土出土土器群(B 群)とを比較して、その特徴を次のように述べている。

- (a) A 群には磨消縄紋がないが、B群にはある。
- (b) A 群の上部は鐘形、B 群は「八」の字状上部である。
- (c) A 群では変形工字文に深く明瞭な袂りが、B 群では縦長の刺突が加えられる。

そして、(a)の「磨消縄文の定着」、(c)の「変形工字文の変化」に後続する土器型式との関連性を認めて、A群すなわち「設定当初の内容である二枚橋遺跡出土土器群」をもって「二枚橋式土器」とし、またB群は「二枚橋式とそれに後続する土器群が混在したもの」(大坂 2007)と捉えて、その〈混在した後続する土器群〉が「良好なまとまり」として出土する遺跡(三ツ石 2 遺跡(北海道北斗市)、下添山遺跡(同前))が存在することを根拠として、別の土器型式として捉えている。これによって、下北半島地域の〈二枚橋式土器に後続する土器型式〉と同じ土器型式が北海道島側(南部)にも存在している、すなわち両地域ともに同じ土器型式圏である、と大坂が考えていることがわかる。なお、この「後続する土器型式」が何であるかは明記されていないが、「二枚橋式土器に後続する土器型式として恵山Ia 式、恵山Ib1 式、…」(大坂 2007:53)と言った記述から、大坂が設定・命名するところの「恵山Ia 式」であるとわかる。

#### (4) 問題の核心

前記の内容を整理すると、これまで二枚橋遺跡や瀬野遺跡の出土資料を基準資料として捉えられてきた「二枚橋式土器」を新旧に2細分して、高瀬はそれらを「二枚橋式古段階」「同新段階」と呼称し、大坂は「二枚橋式」「恵山Ia 式」と呼称したといった、型式名称の違いだけに見えるが、実はこの点に「二枚橋問題」の焦点が隠されている。

高瀬は、二枚橋式土器はその新段階から北海道島側に分布圏を広げるのであって、古段階においては北海道島側には「(青苗 B)」<sup>注5</sup>が存在していたと捉えている(高瀬 2005:68 第 1 表)。そして、後続する土器型式の段階では、北海道島側と本州島側との土器群の相違が急速にはっきりとしてくるので、これをもって北海道島側の土器群を「恵山式土器(群)」と捉える(呼称する)ことを述べている(高瀬 2005:65)。これに対して大坂は、限定的に捉えた「二枚橋式」の段階にはすでに北海道島側にまで分布圏を広げていると考えており、礼文華遺跡(豊浦町)や南有珠 6 遺跡(伊達市)、オヤコツ遺跡(伊達市)などがそこに含まれている(大坂 2007:57)。高瀬の「二枚橋式古段階」と大坂の「二枚橋式」とは名称が異なるだけの違いであるかのように思われたが、実際の土器の評価(土器型式の認定)においてかなりの差異、少なくとも分布圏の理解においては決定的な違いが生じていることがうかがえる。なお、大坂は「筆者も高瀬氏が指摘したような型式学的差異があることは認めているので、見解の相違は、どの基準を用いて型式を区分するかという点をめぐり、用いた方法論の差異から生じている」(大坂 2007:75)と述べている。「見解の相違」がいかなる点を指しているのかが明記されてい

いので要領を得ないが、「高瀬氏の捉えた変化は二枚橋式から恵山Ia式へかけて生じた変化を含んでいる」とも述べているので、〈量的な変化〉では区分の指標として不向きであることを指摘しているものかと推察される。

また、大坂は北海道側において自らの「二枚橋式」に後続する土器型式として「恵山Ia式」土器を位置付けている。これは北海道島側の土器型式編年に限られたことではなくて、本州島側においても同様に考えていることが後にはっきりとしてくる(大坂 2010:99 表1)。すなわち、大坂の「二枚橋式」が北海道島側に分布圏を広げた後、本州島側・北海道島側の両地域で「恵山Ia式土器」へと変遷を遂げたことを意味している。ここで「恵山」の名称を土器型式名として使用することが問題であり、その意味は深長である。このような理解はやがて、後出の『田舎館式』の中で恵山式との類似性が指摘されてきた資料は、周辺地域から農業社会に合流した、恵山式土器制作者を含む集団の製作したもの——いわば『恵山式そのもの』——だった(大坂 2015:464)といった解釈へと発展してゆく。文意を正確に読み取ることが難しい文章であるが、たとえば次のような佐藤剛の見解——前出の「下添山式土器」や恵山式土器を「弥生土器」であると捉えて、北海道「島南西部地域」は、続縄文文化の初頭において、いったんは縄文文化から続縄文文化となり、その後に弥生文化となり「ふたたび続縄文文化になる」(佐藤 2022:11)といったような見解——と対局をなしている。

筆者は、土器型式圏の分布域が変動する現象について土器型式圏と等値される特定の人間集団が広がりたり縮小したりするような解釈に対して、それを「土器型式実体論」(小杉 2001:127)として批判して、その現象が生じるメカニズムを説明することの必要性を従前より述べてきた。確かに特定集団の空間的な拡大・縮小が原因であることもありうるが、それは1つの可能性に過ぎず、例えば、これまでA式土器を製作していた特定の地域(小地域)に住む人たちがその製作をやめて、隣接するB式土器圏の人たちが作る土器(B式土器)を作り始めることによっても、その現象は生じ得ることであり、それらの可能性を限定し、やや簡単な図式的ではあるが、そのいずれかを判定する方法を示してきた。佐藤は先の解釈を行う前提として、「島南西部に本州島東北部地域や、津軽・下北半島などからの、大量の集団移動や集団移住を想定していることではなく、島南西部地域の縄文時代晩期の人々が、続縄文時代初頭に後の下添山式期以降に今度は弥生文化・社会の生活の仕方(定住的な社会・文化)を主体的に導入した結果であると考え。ふたたび続縄文文化・社会の生活の仕方(遊動的な社会・文化)を主体的に導入するのは、聖山K群のあり方からは、『後北B式～後北C1式併行期』と考える」(佐藤 2022:12)ことを示している。「大量の集団移動や集団移住」を考えないことの根拠は、例えば続縄文期の初頭においては、主要な器種である深鉢形土器が、その底部の形態の違いから「在地の技法」が主に用いられていると判断し、「東北地域北部などの他地域からの大規模な集団移住などは想定できない」(佐藤 2022:23)というものである。何をもち「在地の技法」として判断できるのかに方法上の問題を残すが、それとは別に、一見して土器型式実体論を回避しているような解釈となっているが、それとは真逆の方向に振り切れて土器を含む考古文化を生活実態として直接的に解釈してしまっており、「大量の集団移動や集団移住」が生じたのか否かの問題が実質的に検討されたとはいえないであろう。

土器型式圏や土器様式圏が拡大・縮小する現象は、縄文文化や弥生文化の内部において常態的に発生するものと評価して、かつて筆者は「狭間の土器群」に生じる現象であると捉えた。また、縄文から弥生への移行期に、北部九州で生じた技術伝統を異にする土器群が混交する状態を文化接触による「端境の土器群」に生じる現象であると指摘した(小杉 1995:106)。この両者が重なり合う、すなわち「狭間の土器群/端境の土器群」の問題が、上記の佐藤が論じたような視点や解釈(遊動か定住か、食料獲得か食料生産か、など)として露骨に浮上してくるところに、「二枚橋問題」の難しさがある。

## II. 土器型式圏の広がりの変化は何を意味するのか

### (1) 方法的回顧

土器型式編年研究において、土器型式圏の広がり(分布圏)が時間の変化に応じて変化する現象が知られている。「土器型式実体論」者にとっては、それは「〇〇式土器」集団の拡大であったり、あるいは「++式土器」集団の縮小であったり、とストレートに理解されることになる。このような理解は前提として「土器型式」を特定の実体的な集団とするところが誤っている。筆者は、このような現象に対する有効的な問題設定として、次のような定式を以前に提起したことがある。

「土器型式圏が時間的に拡大縮小する現象、これは(...中略...)無人の原野に土器型式圏が拡張したのではなく、小地域 z が土器型式 a 圏から別の土器型式 b 圏へと変化した場合、それは小地域 z の人達が土器作りを a から b へと変更したことによる結果なのか、あるいは b 圏から小地域 z へある程度の規模の集団移住がなされたためなのか」(小杉 2001:127)。それを判定するために、この例を用いるならば、土器型式 a と土器型式 b との間にて、それぞれの技術伝統に根ざした「固定的な表現方法」(見た目での=外観的観察による、模倣が困難である要素)を見出し、小地域 z で新たに変化した(作り出された)b式土器がいずれの「固定的な表現方法」を用いているかで判定ができる、と考えた。

このような視点と分析の実践は 1984・87 年の拙著にて実践したものであるが、相前後する時期に他の研究者からも類似した視点での研究方法の提示・実践がなされることがあった(家根 1984・深澤 1986)。

家根祥多は縄文晩期末から弥生前期初頭にかけて、深鉢形(甕形)土器の器壁の作り(粘土帯の積み上げ方と粘土帯幅)が上帯の下端が下帯の内削ぎ状の上端の傾斜面に接合される内傾接合かつ狭い粘土帯から、下帯の外削ぎ状の上端の傾斜面に接合される外傾接合かつ広い粘土帯へと変化することを突き止め、後者の技術的な特徴が同時期の朝鮮無文土器にも認められることから、「一連の弥生の甕の生成に先の朝鮮無文土器に似る深鉢が深く関わっている」こと、そして「縄文土器の深鉢と共通の機能を持つ弥生土器の甕が、むしろ直接には朝鮮無文土器の系譜を引き、これが縄文の要素を吸収同化して成立する」(家根 1984:66)ことを論じた。ただし、この段階では議論の焦点は土器の系譜の問題にとどまっており(土器が主語として語られており)、製作者の問題にまでは具体的には踏み込まれていなかった。

深澤芳樹は畿内を中心とする弥生土器の地域性を「広口壺の紋様」と「甕の仕上げ方」に着目することにより、「地域性の変遷、内的・外的変化、複雑化・簡略化の過程」の検討を行った。その前提として、「土器の表面的要素」である紋様は「土器そのものがうごいたり、土器をみた人がうごくことによって容易に伝わる」のに対して、「土器の基層的要素」である仕上げ方は「実際に土器を作っている場で学習しないかぎり習得できない」、よって「実際に土器を作る人が移動しないと伝わらない」と考える。また、土器の紋様と仕上げ方における内的変化・外的変化と複雑化・簡略化についても、内的変化が「あくまでも主体的な変化である」のに対して、外的変化には「積極的にとりこむいわば能動的な場合」と「一方的にこうむったいわば受動的な場合」とがあり、そして複雑化は「手間をかけた積極的な変化」であるのに対して、簡略化はさらに二分されて「積極的に手間を省いた変化」と「模倣段階で完全に模倣せずに手を抜いた変化」との二種類があることを指摘する(深澤 1986:173-174)。

このような研究動向を受けて、林謙作は縄文早期に素山上層式土器の分析の際に、「じかに目に見える要素 overt element」(「みようみまねのできる要素」と「じかに目には見えない要素 covert element」(「みようみまねの利かぬ要素」という概念を用いて、同じ集落に共存する2つの「技術グループ」の技術の伝承の仕方を考察した(林 1990:159)。さらに林の指導を受けていた高瀬克範は「集団移動の有無を検証する」ために、「本場」と

「波及地」とにおいて『波及地』において以前から存在していた要素を「older」、「波及にともなって出現する新しい要素」を「newer」として、これらを overt/covert に掛け合わせることによって、比較検討する属性を4つの性質〔領域〕(overt-newer/overt-older/covert-newer/covert-older)に分割し、分析対象(土器)の各種属性がこの4領域においていかなる関係にあるかを調べるといったいわゆる「属性分析」を、続縄文土器において実施した。

## (2)属性分析と固定的な表現方法

そこで高瀬が分析対象としたのは、続縄文初頭の「二枚橋式土器」と「恵山2式土器」である。本州島の最北端の下北半島を主要な分布圏とする弥生前期の二枚橋式土器が、その後半において分布域を道南地方にまで広げた現象と、その道南の「二枚橋式土器」から型式変化を遂げた「恵山1式土器」が、その次段階の恵山2式土器の段階に道央地方にまで分布域を広げた現象とが、そこでの具体的な分析対象となっている。ここでは二枚橋式土器を例にしてその内容と問題点を点検する。

まず「本場」が下北半島であり、「波及地」が渡島半島あるいは道南地方ということになる。また、「本場」・「波及地」の各土器群、それに加えて「波及地」における「前段階」の土器群、これら三者の土器群が直接的な分析対象となる。具体的に取り扱われた資料は、「本場」(下北半島)では瀬野遺跡、「波及地」(道南地方)では南有珠7遺跡、波及地の「前段階」(道南部北海道在地系土器群)としての尾白内貝塚、南有珠7遺跡の各出土土器である。「比較資料」として本場の前段階(二枚橋式古段階)にあたる二枚橋遺跡出土土器が取り扱われる。資料としては、「定量的な属性分析に耐えうる遺跡を選定」(高瀬 1989:23)するために、「日本海側と太平洋側の地域性を考慮した遺跡の選定は行っていない」(同:39)ことが述べられる。

いよいよ4つの性質〔領域〕での各属性が比較検討されるのだが、この分析において実質的な意味をなすのは、「波及地」の「二枚橋式土器新段階」における covert element (固定的な表現方法あるいはみようまねの利かぬ要素)が、older であるかの1点(この場合の older とは「波及地」の前段階の要素と同じであるか、かつ「本場」と異なっているか)であり、加えて検討対象の土器が〈その土地〉すなわち「波及地」で製作されたか否かの検討である。また、「波及地」の「二枚橋式土器新段階」における covert element が newer である場合には、その属性が「本場」において前段階(二枚橋式土器古段階)から当該段階(二枚橋式土器新段階)にかけて存在していた(「波及地」においては newer だが、「本場」においては older である)ことの確認が必要になってくる。他の overt element の比較検討は模倣製作の有無や程度を推し量るためのものであり、当初の目的である「土器製作者の移動を認めうるか」といった問題設定とはあまり関係ない。

高瀬の分析で「二枚橋式期(成立期)」の土器における「covert element」とされた属性が何であるかをチェックすると、「older」としては「沈線文の工具」と「キザミの付け方」の2属性と、それらに加えて「キザミ押圧方向」である。「沈線文の工具」については「波及地・前段階」(尾白内II群)と「波及地」(南有珠7粗製)との間に共通点(条線が残る)が見られる。「キザミの付け方(傾き)」は「本場」(瀬野)と「波及地」とにおいて、精製土器には違いが見られ、粗製土器では双方が同じであった。「キザミ押圧方向」については、「本場」では精製土器において「垂直」「右方向」、粗製土器において「垂直」のみ、「波及地」では精製土器において「垂直」「右方向」、粗製土器において「垂直」「右方向」であり、この結果からは本場の「下北半島では精粗による技術の使い分けが見られる」とし、それとは対照的に波及地の「北海道ではそれが明瞭とならない」といった評価になっている。提示された表(高瀬 1998:30 第7表「成立期」の属性分割表:図1)から、実際の検討内容を読み取ってみると次のようになる。

「沈線文の工具」について実際に分析した数量は、尾白内II群(波及地の前段階)で 3[60]+2[40]=5 点[%]、南有珠7(波及地)で精製 67[100]+0=67 点[%]／粗製 2[1.6]+122[98.4]=124 点[%]、瀬野遺跡(本場)で精製 302[100]+0=302 点[%]、二枚橋遺跡(本場の前段階)では精製 365[100]+0=365 点[%]である。尾白内II群の資料数の少なさも問題だが、尾白内II群と南有珠7(粗製土器)の“ある／なし”の比率は「共通」ではなくむしろ逆転している。

「キザミの付け方」について実際に分析した数量は、尾白内II群(波及地の前段階)で 1[25]+2[50]+1[25]=4 点[%]、南有珠7(波及地)で精製 12[30.8]+27[69.2]+0=39 点[%]／粗製 2[15.4]+8[61.5]+3[23.1]=13 点[%]、瀬野遺跡(本場)で精製 40[48.2]+32[38.6]+11[13.3]=83 点[%]／粗製 0+2[100]+0=2 点[%]、二枚橋遺跡(本場の前段階)では精製 109[67.3]+37[22.8]+16[9.9]=162 点[%]／粗製 0+3[100]+0=3 点[%]である。全体的に資料数が少ないが、精製土器に違いがあるとされた内容は下北では「垂直につけられる場合が多い」であり、その値は〔垂直:左傾:右傾〕:本場〔48.2:38.6:13.3〕:〔波及地〕〔30.8:69.2:0〕である。粗製土器では同じであるとされた値は〔垂直:左傾:右傾〕:本場〔0:100:0〕:〔波及地〕〔15.4:61.5:23.1〕である。はたしてこの程度の比較資料数と比率の差で、指摘内容の妥当性は保証されるであろうか。「キザミ押圧方向」について実際に分析した数量は、尾白内II群(波及地の前段階)で 2[50]+2[50]+0=4 点[%]、南有珠7(波及地)で精製 17[43.6]+20[51.3]+2[5.1]=39 点[%]／粗製 9[69.2]+4[30.8]+0=13 点[%]、瀬野遺跡(本場)で精製 51[61.4]+25[30.1]+7[8.4]=83 点[%]／粗製 2[100]+0+0=2 点[%]、二枚橋遺跡(本場の前段階)では精製 82[50.6]+69[42.6]+11[6.8]=162 点[%]／粗製 3[100]+0+0=3 点[%]である。「本場」の精製土器で「垂直」「右方向」がほとんどといった評価は、〔垂直:左から:右から〕:本場〔61.4:30.1:8.4〕(資料数 83 点)の値によるものである。同様に粗製土器で「垂直」のみと言った評価は、〔垂直:左から:右から〕:本場〔100:0:0〕の値によるものである。

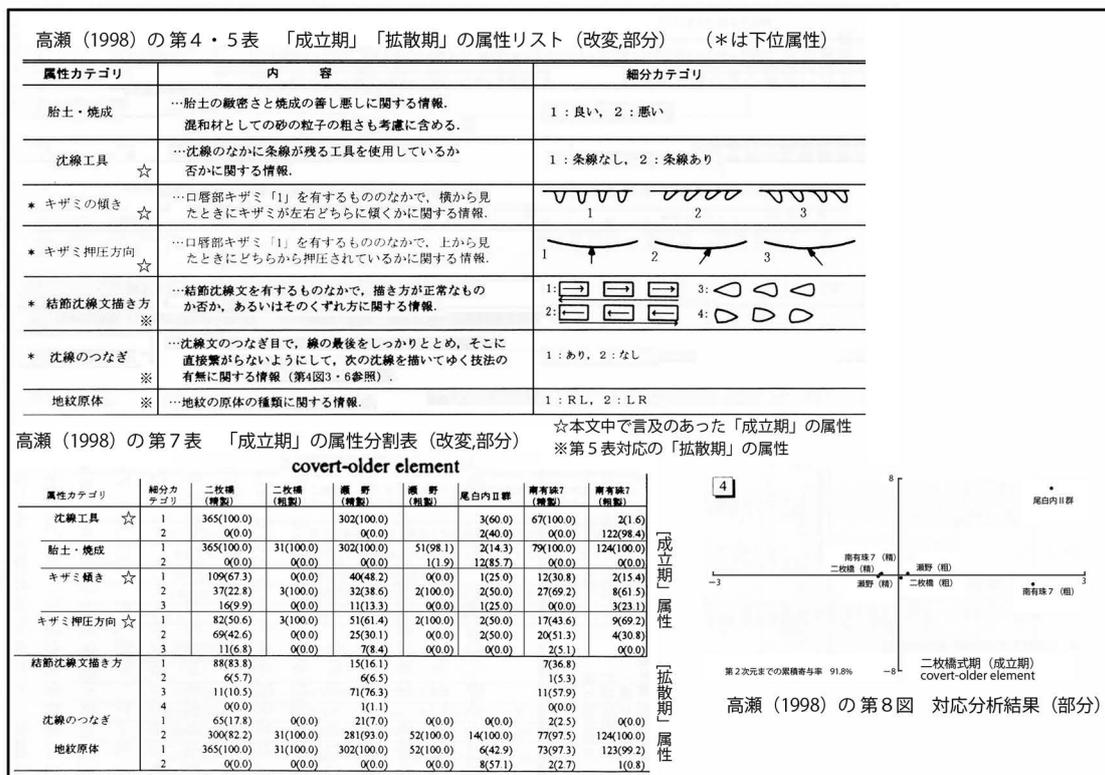


図 1 高瀬論文 (1998) における属性分析 (抜粋)

が、検討した資料数は2点に過ぎない。「波及地」の精製土器で「垂直」「右方向」がほとんどといった評価は、〔垂直:左から:右から〕:波及地〔43.6:51.3:5.1〕(資料数 39 点)の値によるものである。同様に粗製土器で「垂直」「右方向」がほとんどといった評価は、〔垂直:左から:右から〕:波及地〔69.2:30.8:0〕(資料数 13 点)の値によるものである。下北半島では概数で精製土器において「垂直・右方向」:「左方向」=精製で7割:3割(資料数 83 点)、粗製で同=10 割:0 割(資料数 2 点)、この結果をもって「下北半島では精粗による技術の使い分けが見られる」とし、北海道側では概数で精製土器において「垂直・右方向」:「左方向」=5 割:5 割(資料数39 点)、粗製で同=7 割:3 割(資料数 13 点)、この結果をもって「北海道ではそれ(=精粗による技術の使い分け)が明瞭とならない」と評価することに、どれほどの確実性があるだろうか。

百分率にすると等価的な比較が行われているように感じられるが、分析資料の実数を確認するとそのような評価を下すことにはかなりの無理があることがわかる。また、このような分析における最大の問題点は、いかなる属性をもって「固定的な表現方法」(covert element)にしているかである。それは「成形・施文行程で付与されるもの」(高瀬 1989:26)とされており、具体的には「二枚橋式土器」においては先の 3 属性であり、属性分割表(図1の「第 7 表」)には、それら他に「胎土・焼成」「結節沈線文描き方」「沈線のつながり」「地紋原体」の 4 属性が加えられている。しかし、これらの属性をもって直ちに技術伝統に根ざした土器製作者の違いを判別することができるだろうか。そこに示された程度の属性における差異は、「見た目の模倣」でも簡単に取り込むことが可能なものであり、「成形・施文行程で付与されるもの」であるからといって、それをもって直ちに「固定的な表現方法」(covert element)と評価することはできない。

ここで取り扱っている「沈線文の工具」や「キザミの付け方」、「キザミ押圧方向」が実際にはいかなるものであり、このような比較・評価を行ううえで適切な属性であるか否かの検討とそれを保証する実資料の提示が不可欠である。論文中ではこれらの属性の検討のみで、製作者の移動の有無を評価しているわけではなく、分析対象としてあげられた多くの属性の分析結果をもって、それらを多変量解析の1つである「対応分析」を行うことによって全体的な評価を行い、「下北半島と渡島半島の高い共通性の陰に潜むこのような差異を考えあわせると、土器製作者の大規模な移住を想定することはむずかしいだろう」となり、さらに「技術的な地域性は精製土器においてもみとめられるので、製作者の移動はやはり認めがたい」といった結論に達することになる(高瀬 1998: 37)。

同様な分析は道央地方における「恵山 2 式土器」についても行っている。例えば高橋正勝は「アヨロ 2b 式期になると、日高地方を除く道央部は、ほぼ完全に恵山式土器文化圏に吸収され、それまでの在地の土器は消失する」(高橋 1984:381)のような評価を与えているが、これに対して「恵山2式の道央への波及は、あくまでの道央の土器製作者による受容の結果である」(高瀬 1998:37)といった結論を導き出している。このような分析によって得られた結論はインパクトが大きく、ここで指摘した分類枠や統計的処理やの妥当性の検証を十分に行うこともなく、たとえば「こうした在地の系統との連続性は、恵山式土器の分布拡大とも捉えられる現象が大規模な土器製作者の移動に因らなかつたという高瀬克範氏の分析(高瀬 1998)とも整合的である」(大坂 2010:93)といったような傍証としての引用・評価もなされることもあるので、注意を要する。

高瀬が用いた対応分析(コレスポネンダンス分析)は、各遺跡における各種属性の出現頻度(高瀬 1998:30-31 第 7・8 表)の比較によって、遺跡間の関係の近さ・遠さを散布図と呼ばれるグラフ(高瀬 1998:32 第 8 図)で視覚的に表現する統計的な手法である(図 1)。互いに関連の強い属性の土器を多く出土した遺跡は、原点(0,0)から同じ方向に配置される。高瀬の分析の特徴は、そのような対応分析を先の overt/covert と older/newer とを掛け合わせた 4 つに分類された属性群において実施した点である。結局、分析結果の有効性は overt と

covert との判定がどれほど確かなものであり、その根拠を明示しながら実施し得たかに帰される。また、独自の視点から土器を構成する多くの属性を設定して(高瀬 1998:27-28 第 4・5 表)、その数量化を行った点も特徴である。極端な言い方をすると、行と列からなるクロス集計表の各欄を埋める数値がいかなるものであっても、特定の統計的な処理を正しく行えば一定の「結果」は得られるのであり、そしてその「結果」が解釈されることになる。重要なのは、数量化の前提となる分類枠の設定(属性の選定)がいかに適切になされたかにかかっている。

土器型式圏の拡大・縮小現象に対して我々が 1980 年代後半頃から設問化、分析の実践を重ねてきた方法は、分析対象とする土器群(土器型式)に対して、それぞれの技術的な特徴を慎重に再現的に明らかにして、それを根拠として実施するものであった。それを引き継ぎ、分析対象とする土器が多くの破片資料であっても、それを数量化して統計的に分析する方法を開拓(属性分析を導入)しようとする果敢な試みは、実践方法としての汎用性を高めて、多くの事例に対して分析を可能にする方向を目指したものだとして評価したい。しかし、未だにそのような分析事例が多く現れてこない一因は、属性分析の前提となる数量化のための分類枠の設定が、機械的で定式的なものであっては意味がなく、分析対象である土器型式に対して技術伝統に根ざした固定的な表現方法を把握して、それを分類枠とすることがいかに難しく、また重要であるかの表れでもある。

しかし、属性分析ではなくとも、取り扱う資料群に対しては一定の数量的な把握は必要である。ここで問題としてきたような土器型式と土器製作者(集団)との関係を考察するためには、厳密な数量化の前に、対象とする資料群(土器群)の内容、すなわちその組み立て(構成)、それを組み立てる各種要素(タイプや、さらにそのタイプを構成する要素や)を明らかにして、まずはある程度の数量的な把握を行うことが必要であると考ええる。それがこれまでに述べてきたところの土器群構成の把握(土器群構成分析法)である。

### (3)遺跡分布と地域区分

本論でも再三使用してきたところであるが、北海道島内の地域区分(地域認識)として、「道南・道央・道東・道北」といった呼称は、北海道で生活している者にとっては日常的に便利な言い方でもあり、また諸方の研究分野においても都合のいい表現として汎用されている。先の高瀬論文(1998・2005)でも頻繁に登場した、いやむしろ研究の前提とされた地域区分・用語は、「道南部」「道央部」であった。先の「二枚橋式土器」に関する分析においては、本州島側の「下北半島」では「本場」の遺跡として瀬野遺跡、そして比較資料(本場の「前段階」として二枚橋遺跡)が取り扱われ、一方、「道南部」では「波及地」の遺跡として南有珠7遺跡、そして波及地の「前段階」の遺跡として尾白内貝塚(尾白内II群土器)が取り扱われ、これらの都合3ないしは4遺跡をもって「下北半島」と「道南部」との土器型式圏(「二枚橋式土器」)について集団移住の有無が論じられていたのである。

属性分析を実施するのに必要となる分析資料数を確保するために、「日本海側と太平洋側の地域性」についても最初から検討の対象外に置かれている。このような地域的な取り扱いも、もう 1 つの分析対象である「恵山2式土器」においても同じであり、そこでは「道南部」(南川遺跡、小幌洞窟遺跡)と「道央部」(N295 遺跡、K482 遺跡)といった地域が、実質的には 4 遺跡の事例をもって、その間における集団移住の有無が論じられることになる。「道南部」や「道央部」と言った表現は、その概括性について注意しておけば便利な用語法ではあるが、しかしながら土器型式と土器製作者(集団)との関係を考察するのであれば、先にそのための方法を示した際にも述べたように、まずは土器型式圏の拡大や縮小が生じた「小地域」<sub>z</sub>、あるいはその程度の範囲の小地域を分析の対象とするべきであって、土器型式や土器型式圏をあたかも記号のように一括して取り扱うことには無理がある。

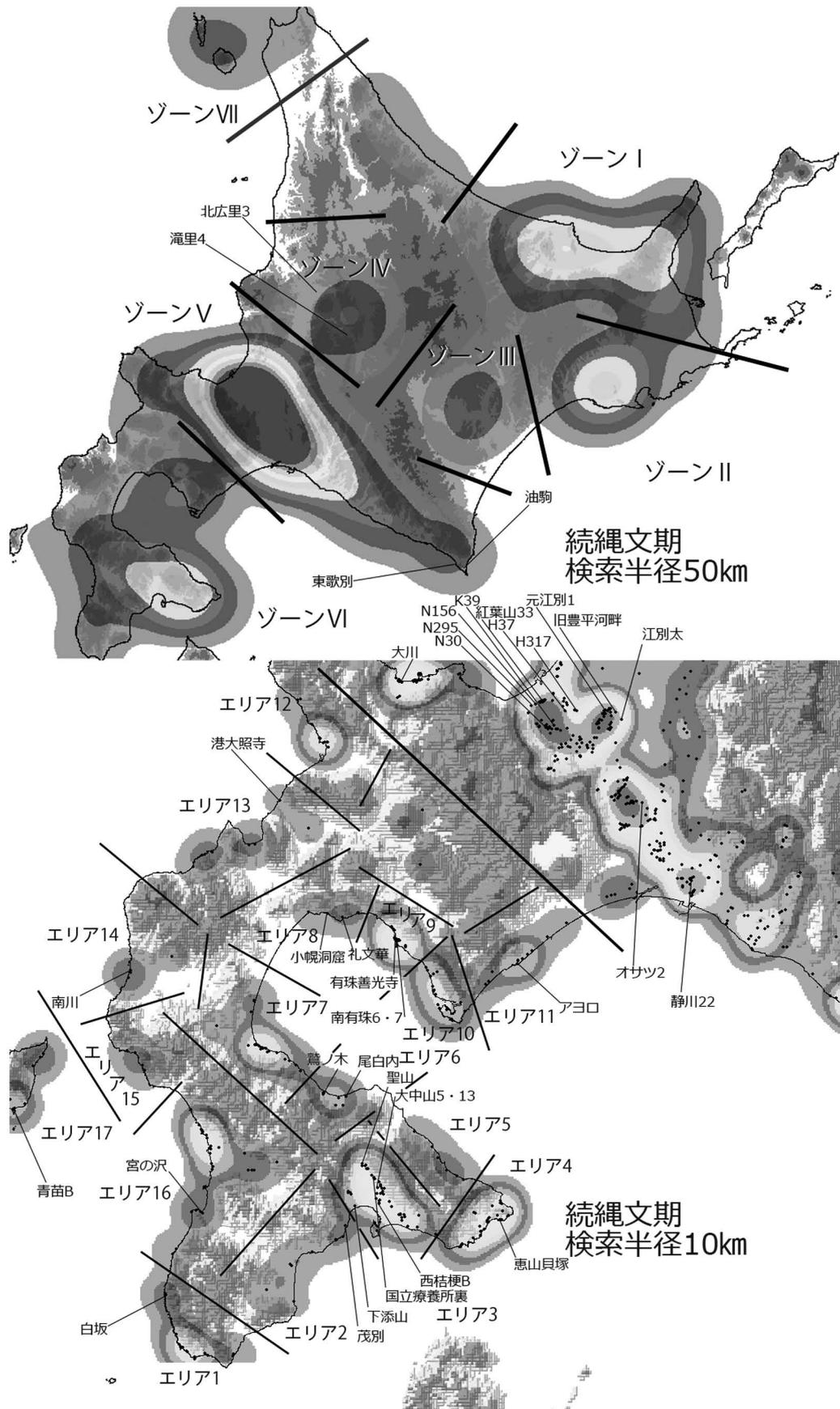


図2 遺跡の密度分布による北海道島での地域区分 (ゾーンとエリア)

では、具体的にどのような地理的な範囲を分析対象とするのが妥当であろうか。遺跡の分布図において、特定の期間内に遺跡が集中する範囲では、集落(遺跡)間での頻繁な日常的な接触が行われていた可能性が高いと考えられるので、その範囲をもって1つの「地域社会」として仮定する。さまざまな考古資料を分析した結果を、まずは当該資料を出土したそれぞれの遺跡に戻して、そしてその遺跡が位置するところの地域(地域社会)を単位として、評価・解釈することを試みたい。筆者はこれまでの研究においても、遺跡の点分布状態に対してカーネル密度推定法を援用して地域区分を行うことを実践してきた。この方法では「検索半径」を変えることによって密度分布の広がりが増える。北海道島全域の縄文文化以降の全遺跡の点分布に対して、検索半径50 kmで密度分布を求め、それによって地域区分を行った結果、北海道島には6つの地域が通時的にはほぼ同じ範囲に出現することが確かめられている(図2の上:ゾーンI～VI。ただし縄文中期には他時期には顕在化していない高密度分布域が宗谷～利尻・礼文島周辺に出現。これをゾーンVIIとする。)(小杉 2009:46)。ゾーンVIは慣用的な道南地方の範囲とおおよそ重なりあう。そこでゾーンVIについては、その中にある縄文中期の全遺跡の点分布に対して、いくつかの検索半径で密度分布の表出を試みた結果、「検索半径 10 km」で顕在化する密度分布の広がりが増え、先に述べたような地域社会に対応してくる可能性が高いのではないかと考えた(図2の下:エリア1～17)。このようにして得られた地域区分(エリア)の中に分析対象とする遺跡をプロットすることによって、個々の遺跡(出土土器)に対する分析の結果を、いきおい土器型式圏の範囲にまで敷衍するのではなくて、その地域(地域社会)における「出来事」として考察することができるであろう。

### Ⅲ. 土器が「かわる」とはどういうことか

#### (1)土器がかわる

土器がかわる(変わる／替わる／代わる)、とはどういうことを意味しているのだろうか。①:個々の土器の作り方や表現の仕方が変わるということ。これは当事者において生じる変化である。②:遺跡から出土する土器がかわる、例えば下層出土の土器と上層出土の土器とは同じではない、ということ。①は実際における変化、②を現象における変化と呼び分けてみよう。さらにまた、③:土器型式(あるいは土器様式)がかわる、といったことを思い浮かべた人もいよう。これは先に論じた土器型式変遷観ともつながる内容である。

① まず、実際における土器の変化としては、作り方や表現の仕方が徐々に(場合によっては製作者も明確に意識することもなく)変わる、ということがある(漸移的变化、アナログ的变化)。

$A \rightarrow A' \rightarrow A''$

モンテリウスが青銅製の剣やブローチを例として説明したような「型式学的連続性」は、この内容に近い。

あるいは急速に変化する場合もある(長足的变化、デジタル的变化)。

$A \rightarrow B \rightarrow C$

その変化の要因が技術開発・改良などによる内発的な場合と、他から(外の地域から)の技術やアイデアの導入、すなわち外発的な場合とがある。

② 次に、現象としての土器の変化とはいかなるものか。われわれは遺跡からの出土資料を一定のまとまりをもった土器群として認識する。それは一定の時間内における累積の結果であると同時に、当事者における使用・廃棄時と遺存時(多くの場合は土中埋没時)とにおける部分的な消失(欠損)過程を経たものである。さらに、攪乱によって異なる時期の土器の混入などが生じている場合もあるが、そのような混入資料を除去した一群の対象は、前記の①の変化を含みうるところの、一定の時間内における「実際の土器使用の実態を反映したもの」

(「土器群」)と理解することができる。よって現象としての土器の変化とは、そのような「実際の土器の製作・使用の実態を反映したもの」が変化したことを意味している。

③ では、土器型式(あるいは土器様式)が変わる、とはいかなることか。土器型式はその定義するところでは、土器型式編年の特定の時間的・地理的な単位である(「地方差、年代差を示す年代学的単位——我々が型式と云って居る」山内 1932・33[1967 再録:2])。すなわち「A式土器」が「B式土器」へと変化することの意味となる。小林行雄による弥生土器研究における「様式」は、〈実際の土器製作・使用の実態を反映したもの〉であると同時に、土器様式編年研究における特定の時間的・地理的な単位でもある(小杉 1995:82)。土器型式、土器様式共に「特定の時間的・地理的な単位である」という意味において同じであるとの前提のもと、「土器型式」の用語をもって以下の考察をおこなう。

特定の時間的・地理的な単位である土器型式は、地域を限定するならば、理念的には積み木を積み上げたように四角い時間枠が1列並んだような配置になる。しかし実践的には、同一の地域において、例えば特定の特徴を持った土器群が「A式土器」のコア(核)な部分として設定され、また同様に別の特徴を持った「B式土器」のコアな部分が設定された際に、仮にA式土器とB式土器とが時間的に接した先後関係にある場合でも、設定の当初から「A式土器に含まれる最も新しい段階の土器(群)」と、「B式土器に含まれる最も古い段階の土器(群)」とが時間的に接しているとは限らない、むしろ接していない方が普通である。それぞれの土器型式についての調査・研究の進展に応じて、コアAとコアBとの間を埋めるような土器群の存在が徐々に明らかになってくる。すなわち、より「B式土器に接近したA式土器に属する土器(群)」や、また逆に、より「A式土器に接近したB式土器に属する土器(群)」が発見されることによって、「A式土器の最新段階の土器(群)」から「B式土器の最古段階の土器(群)」への連続的な変化(漸移的变化、アナログ的变化)が確認されることになる。では、「A式土器の最新段階の土器」と「B式土器の最古段階の土器」とは非常に近似した内容であるはずであるが、「A式土器の最新段階の土器」がA式土器であり、「B式土器の最古段階の土器」がB式土器である根拠はなんだろうか。考えられる1つは、「A式土器の最新段階の土器」を含むA式土器は出土するが、そこからは「B式土器の最古段階の土器」を含むB式土器は出土しない、また逆に、「B式土器の最古段階の土器」を含むB式土器は出土するが、そこからは「A式土器の最新段階の土器」を含むA式土器は出土しない、といった内容の遺跡や地層(文化層)が存在すること、である。このような遺跡や地層(文化層)が存在したとして、型式学的連続を呈する「A式土器の最新段階の土器」と「B式土器の最古段階の土器」とを明確に判別しうる特徴(要素)をわれわれは認識することができるであろうか。あるいは、諸要素のうちの何らかの特徴によって、「A式土器の最新段階の土器」はB式土器ではなくてA式土器であり、「B式土器の最古段階の土器」はA式土器ではなくてB式土器である、と認めることができるような要素(属性や器種)は存在するのであろうか。適否は別にして、そのような要素(属性)として1つの土器を構成する特定の文様図形や施文方法、部位形態などが指標とされることが、研究の実践上では実際にはある。また、土器群のレベルでは、特定の器種がそのような指標となっている場合も、同様である。しかし研究者の中には、先史土器においては、明確な一線を画して、あるいは特定の短時日を境として、特定の要素(属性や器種)が無くなる、あるいは出現する、ということを実際には(あるいは調査経験的には)認めがたく、残存的なものや発現的なものが存在すると考えている人も多くいると思われる。だからこそ、それは1つの指標(目安)であって、そのような存在を仮定しないと、境界領域においてはA式土器とB式土器とを判別することができなくなってしまうので、その指標(目安)にいくつかの他の要件を加えることによって、判断を可能にしている、それが研究の実際に近いのかもしれない。また、特定の要素(属性や器種)の量的な変化をもって、時間的な先後関係の判定が行われる場合もあるが、それでは「傾向」を指摘で

きたとしても、それだけを根拠として土器型式の判別や時間的細分を行うことは難しく、先の特定の要素(属性や器種)の「ある／なし」と組み合わせ、そのような判断がなされているのが実際に近いのかもしれない。そうすると、量的な変化は、考慮すべき「他の要件」の1つであることと変わらないことになる。

そのような判断を可能にする指標(目安)が個体を構成する要素(属性)や土器群を構成する特定の器種である場合、それらの指標は自らが属する集団(個体としての土器や土器群)全体に対して重要な意味(役割)をもっているとは限らず、その「ある／なし」によって単に特定の時間を示しているのにすぎず、その消失や出現に合わせて他の属性や器種が連動して変化することは期待できない。だがしかし、その指標(特定の属性を備えている個体や特定の器種である個体)が、遺跡での出土状態において他の個体と共存していることを確認することによって、その指標(個体)のもつ時間性を他の個体(器種)にも与えることができ、土器群としての時間的な線引きが可能になると考えられる。

## (2)土器は「論理的である」ということ

このような時間の判定(「それが「あるか、ないか」によって先後関係を知ることができる)を可能にする要素(属性や器種)が存在するとして、では、そのようにして先後関係が確かめられた先ほどのA式土器とB式土器とにおいては、それぞれに属する各個体が「どのような特徴だからA式土器である」とか「B式土器である」といったことは問題ではなくなってしまうのだろうか。そのような指標となる要素(属性や器種)が、それらが属する集団(土器群)の他の要素に対して、構成的になんらかの重要な意味(役割)をもつ(それを「論理的」であると表現する)ことがなければ、その通りである。しかし、指標となる要素( $\alpha$ としよう)が同じ集団(A)内の他の要素(属性や器種)と重要な構成的な関係がある(論理的である)とするならば、指標となる要素 $\alpha$ が出現したり消失したり、あるいは大きく変化したりすると、A内の他の要素 $\beta$ や $\gamma$ 、 $\delta$ …のすべて、あるいはそれらのいくつか、連動しながら何らかの変化を起こしているはずである(ただし、要素 $\alpha$ が「粗雑化」や「簡略化」すると要素 $\beta$ も粗雑化や簡略化し始めた、といった評価は、 $\alpha$ と $\beta$ との間に論理的な関係があつて生じたのか、単に製作上、全体的に粗雑化などが進んだ結果なのかの判断が難しく、ここでの判定には不向きである)。すなわち、土器(群)を構成する要素(属性や器種)間に、特定の論理的な関係が明確に存在するならば、それこそがこの個体はA式土器であるとか、その個体はB式土器である、といった判断を成立させていると考えられる。1つの土器型式に属するすべてのタイプなどの類型に対して、そのような特定の論理的関係が作用しているとは想定しづらいが、いくつかの主要なタイプにおいて特定の論理的関係が作用しているのならば、特定の要素(属性や器種)の「ある／なし」による土器型式の判別の意味や意義も変わってくるだろう。

土器はその製作工程において、粘土の準備(素地作り)から、粘土紐の積み上げ(成形)、文様の施文、器面の仕上げ(調整)、乾燥・焼き上げなどの各工程から成り立っている。各工程にはいくつかの選択肢があり、それらを組み合わせることによって特定の個体が製作される。例えば、素地の準備には「素地 a・b・c…」があり、成形には「底部積み上げ a・b・c…／胴部積み上げ a・b…／口縁部積み上げ a・b…」、文様の施文には「文様帯分割 a・b…／文様図形 a・b・c・d・e…／描出手法 a・b・c…」、器面の仕上げには「調整 a・b・c…」、焼き上げ方法には「焼成 a・b…」などの選択肢があり、それらが適宜組み合わせられることによって1つの個体としての土器が完成する。これらの組み合わせは偶発的に行われるものではなくて、ある程度の自由度をもちながらも、かなり厳格な決まりがあるからこそ、われわれは土器群のなかにいくつかの類型(タイプ)の存在を認めることができ、1つの土器型式が特定のタイプの組み合わせとして認識できるのである。組合せの厳格な決まりこそが、またそこにある程度の自由度が介在することも含めて、土器は論理的である、という意味である。ある個体

をもってそれを A 式土器と判定させしめ、別の個体を B 式土器と言わしめるそれぞれの論理性、A 式土器の定義や B 式土器の定義に生かすことができる論理性、当面は A 式土器か B 式土器かいずれかの論理性を見つけ出すことによって、時間的に先後関係にある両者の判別(線引き)に利用できると考えられる。なお、このような各選択肢の組み合わせ方は、厳格ではあるが、それが製作者たちにとって任意(約束)である場合もあり、また技術的や物理的な制約からであることも想定される。

## IV. 二枚橋式土器再考

### (1) 定義

須藤隆は二枚橋遺跡出土土器の報告において、出土土器の詳細な観察・分類の記載を経て、それを標式資料とする「二枚橋式土器」を設定した。その分布圏は下北半島を中心として青森県東半部、北海道渡島半島、噴火湾沿岸に及び、「この時期に東北地方北部と北海道南部が極めて密接な関係にあった」ことを指摘する(須藤 1970:62)。今ここでは、詳細を極める記載の中から、二枚橋式土器の特徴を器形(器種)と文様を中心に整理しておく。

まず器形としては、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器、壺形土器の4つの基本形態がある(『瀬野報告』〔伊東・須藤編 1982〕では、これらが順次Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類と呼びかえられる。ただし、Ⅰ類は「甕形」ではなく、「深鉢形」と呼称される。下位の細分は同様にアルファベット表示され、その提示内容もⅠ～Ⅲ類においてはおおよそ同じ内容が示されるが、Ⅳ類壺形土器 a～g 類においてはかなり内容が異なっているので注意が必要である。以下の括弧内の解説は主に「/」前が『二枚橋報告』、「/」後が『瀬野報告』の記述に対応する)。Ⅰ類:甕形土器(深鉢形土器)は a 類(長頸甕形土器/長頸深鉢形土器)・b 類(短頸甕形土器/短頸深鉢形土器)・c 類(口縁、頸、体部<sup>註6</sup>の形態分離が行われていないもの/深鉢形土器)の3つに分けられる(図 3)。Ⅱ類:鉢形土器には多くの形態があり、a 類(台付鉢形土器<sup>註7</sup>)、b 類(甕形土器 a 類の小型化器形)、c 類(有段鉢形土器)、d 類(c 類と同形態・浅型/高坏Ⅲb 類小型化器形)、e 類(精製の類「台付鉢形土器 a 類」/高坏Ⅲa 類小型化器形)<sup>註8</sup>、f 類(体部形態が高坏 a 類類似の台付/高坏Ⅲa 類小型化類型)、その他に g・h 類(鉢形)、i 類(台付鉢形土器)、以上の9つに分けられる。Ⅲ類:高坏形土器は a 類(口縁部大波状縁)、b 類(口縁部平坦・低い山形突起)の2類である。ともに高台は「幾分内彎し、裾が太くなる」(須藤 1970:35)ものが多い。Ⅳ類:壺形土器も多様な形態であり、a～g の 7 類に分けられるが、「直立し、細く短い口頸部」「体部中位で強く膨らむ」ものも多く、「概して大形のもの少ない」。壺形土器に分類されたもののうち、g 類(二枚橋遺跡)は、口縁部・頸部・体部における「各部位の形態的分離」や、それに対応した第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ文様帯(後出)の構成や施文手法などの点で、甕形土器 a 類や鉢形土器 a・c 類に類似しており、器高に対する口径の比率をやや小さくした器形であるといえよう。これを壺形土器に加えるのは、他の壺形土器 a～f 類と比しても違和感が大きい。この他に、「蓋形土器」が加わる。

これらの各器形には、次のような文様を加えられる。まず、その文様が施文される文様帯構成については主に甕形土器や鉢形土器では「各部位の形態的分離に対応して文様帯が形成され」ており、それぞれの部位すなわち「口縁部、頸部、肩部の文様帯を各々Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ文様帯」と呼んでいる(須藤 1970:23)。文様は施文の観点から縄文、沈線文、刺突文、結節沈線、刻み目、口縁部装飾の6つの項目で特徴が整理される。ここでの「沈線文」の用語は、沈線文を描線とする文様図形・文様構成全般を指すものとして用いられている。沈線文には3種の主要な文様図形・文様構成である波状工字文、変形工字文、波状文があり、主に体部上半(肩部)の第Ⅲ文様帯で展開される。

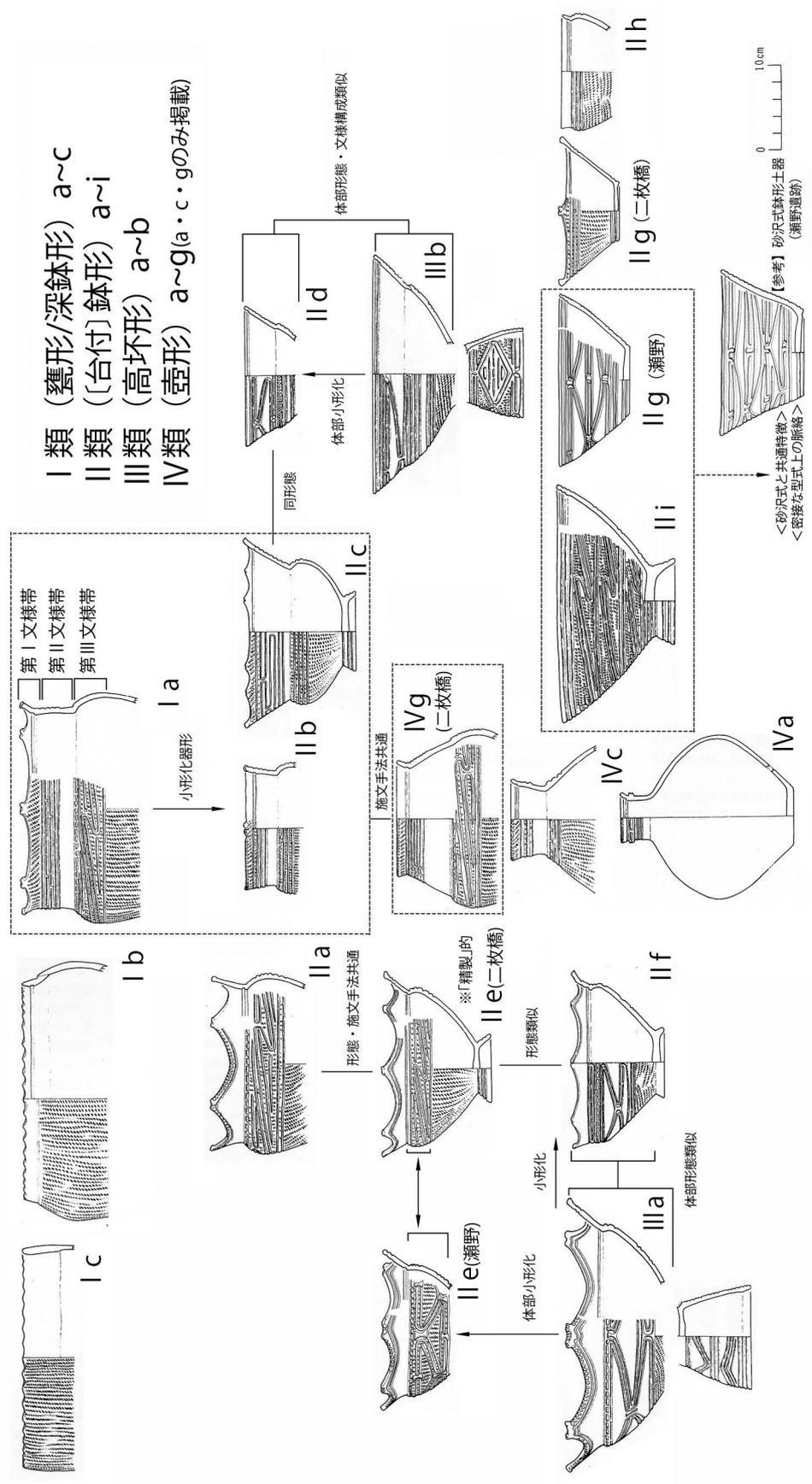


図3 須藤論文における二枚橋式土器の特徴：「施文」と「器形」（須藤 1970、伊東・須藤 1982 より構成）

しかし、第III文様帯で最も使用頻度が高いのは単純な構成の「二～六条程度の沈線」（「三、四条例が最も多い」）をめぐらす平行沈線文列である。同様に第II文様帯の上半部（ここではIIa 文様帯と呼んでおく）でも頻繁に使用される。そこには「沈線の所々に二個一対あるいは一個の小粘土瘤で『結節』が施されている場合」があり、「この手法は砂沢式の粗製土器にも認められる」。また、「二枚橋遺跡資料では二個一対の『結節』が数段に重層した例が稀に認められる」ものがあり、「これは恵山式土器でしばしば行なわれる手法である」。さらに「第II、III文様帯の平行沈線文には、しばしば上下の平行沈線が結び付けられ、入組んだ工字文的な文様構成を取る場合がある」（須藤 1970:20）。

波状工字文は主に甕形土器 a 類、鉢形土器 a・b 類<sup>9</sup>の第III文様帯で使用される。また、台付鉢形 i（瀬野 III 類）では体部全面に波状工字文が1～3段に施文され、間には刺突文が充填されており、砂沢式の高坏との強い関連性が指摘されている（須藤 1970:24）。この文様の由来については、東北地方・北海道南部の「砂沢式期以前の大洞 A、A'式期」、また「北海道南部」の「砂沢式に併行すると言われる大狩部式土器」、これらにはその祖形は認められず、「最も遡りうる例は砂沢式に属する」点が指摘されている（須藤 1970:18）<sup>10</sup>。

二枚橋式土器においては、「大洞A'式、砂沢式の変形工字文に類似した文様」を「変形工字文」とことわって呼称している（須藤 1970:18）。主に高坏形土器で使用され、鉢形土器（二枚橋・瀬野II d類／瀬野II e 類）、稀に壺形土器、高坏の脚部にも使用される。なお、「砂沢式期に見られた鉢形土器と変形工字文との密接な対応関係」が二枚橋遺跡出土資料には認められなくなる点も注意が必要である<sup>11</sup>。この文様の由来については「大洞A'式、砂沢式の変形工字文に後続し、「田舎館式期ではほとんど姿を消している」（須藤 1970:19）。

波状文は主に高坏の脚部に認められるほか、鉢形土器 d 類の第II文様帯、壺形土器の第III文様帯などにもわずかに使用されている。その由来は、「大洞A'式期の変形工字文における施文過程の省略によって生じた大きな周期を有するやや太い篋描沈線による波状文」（須藤 1970:19）と考えられている。

結節沈線は主に第III文様帯の上端区画線として描かれ、第II文様帯と第III文様帯の境を画している。特に鉢形土器と甕形土器で顕著である。その施文方法は「太くて、浅い沈線が一条めぐらされ」、この沈線中にはほぼ等間隔（8～10 mm程度）で「やや深めに粘土を掻き、粘土瘤を一方に寄せ」、その粘土瘤の上面を「篋先き等で平坦」に仕上げる（須藤 1970:21）。結節沈線は砂沢式土器において全く見られない。一方、二枚橋遺跡では「列点文的な手法のもの」はほとんどない。「一般的な傾向としては結節沈線の手法から列点文の手法に変化しているといえるが」、しかしながら二枚橋遺跡においては「層位的事実」から両者間に時期差は認められていない。

須藤は、以上のような器形・文様・技術（主に成形・施文）等の特徴に着目して、二枚橋式土器を次のように評価する。編年的には「縄文晩期直後の砂沢式期以後で、稲作農耕が営まれた田舎館式期に先行する時期」に位置付けられる二枚橋式土器は、「砂沢式の発展型式」であるが、

- ① 砂沢式に特徴的に認められる「変形工字文と鉢、高坏、壺形土器との斉一的な対応関係」は、高坏形土器のみにほぼ限定される。
- ② 鉢形土器、甕形土器における口縁部・頸部・体部の形態的分化とそれに対応した文様帯構成のあり方は、二枚橋式土器において「飛躍的に強化されて展開」する。

そして、全体的な結論としては、特に土器に関することに重点を置くならば、東北北部と「北海道南部」（渡島半島、噴火湾沿岸）において「砂沢式、あるいは砂沢式併行型式を基盤として夫々二枚橋式あるいは二枚橋類似型式が若干の地域色を含みつつも極めて共通性の強い型式として成立」した。やがて「両地域において相

互に強い関連性を有し、影響を与えつつ、その地域的条件によって夫々「稲作農耕が営まれた田舎館式分布圏」と「漁撈生活を主軸とした恵山式分布圏」へと展開した(須藤 1970:62)。

さて、このように整理・評価された二枚橋式土器であるが、これを先に述べたように二枚橋式土器における論理的関係性として再整理することによって、その先行型式と後続型式との間の差異の在り処を探ってみよう。

## (2)二枚橋式土器の論理性 —— 段と帯 ——

以上に整理したように、二枚橋式土器が提唱された際には、須藤によって器種、文様、施文手法、胎土などの各種要素間の関係についての秀逸な説明がなされた(須藤 1970)。その内容を踏まえて、ここでは「上屋屋を架す」とならないように注意しながら、それらの諸項目や諸関係に通底する上屋を支えている基本原理のようなものを探ってみよう。

これまで以上述のように、二枚橋式土器には4つの基本形態(深鉢形土器〔甕形土器〕、鉢形土器、高坏形土器、壺形土器)があり、また形態分化と密接に対応した文様帯の呼称法(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ文様帯)が主に用いられてきたが、ここでは(とりあえず壺形土器を除くが)、形態的(器形的)特徴を優先した「積み上げ段」による呼称方法を提示したい。二枚橋式土器では形態分化と文様帯とが密接に対応しているために、一見して上記の文様帯三帯構成はそのまま「積み上げ三段構成」に、文様帯二帯構成は「積み上げ二段構成」に呼びかえることができそうである。ただし、ここでは「積み上げ段」に着目しているために、その呼称法(数え方)は下側(底面側)から「第1・2・3積み上げ段」<sup>註12</sup>になる。また、器種間で技術的に共通する「積み上げ段」に対しては、同じ名称(番号)を振り当てることとする。そうすると文様帯三帯構成(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ文様帯)の土器(図 3-Ia)は、「積み上げ三段構成」(第 1・2・3 積み上げ段)(図 4-1)として、文様帯二帯構成の土器は(図 3-IIa)、「積み上げ二段構成」(第 1・3 積み上げ段)(図 4-7)として捉えることができる。両者の違いは頸部形態の違いであり、第 2 積み上げ段の有無の点である。文様帯三帯構成の土器群のうちの深鉢形土器は、その祖形が先行型式である砂沢式の深鉢形土器(図 4-4a)に求められている。また、文様帯二帯構成の土器群のうちの鉢形土器については、「口縁部文様帯を欠く資料」として、同じく砂沢式に併行する下北半島の江豚沢式のなかの図 4-4b のような資料がその祖形として指摘されている(高瀬 2005:63)。両者のそれぞれの祖形と目される土器を、前者は「祖形 a」、後者は「祖形 b」と呼ぶことにする。

積み上げ二段構成と三段構成との間には、明確な相違点と共通点がある。まずは相違点、第 1 段の上端から上方への器壁(粘土帯)の積み上げ方法には、両者の間に大きな隔りがある。第 1 段の上端部を起点として、三段構成では内傾気味に第 2 段を接続し、一方で二段構成では外傾気味に第 3 段を接続する(図 4 網掛け)。両者の共通点は、第 1 段の上位に接続する積み上げ段(三段構成では第 2 段、二段構成では第 3 段)が、無文帯として縦方向に拡幅化する点である。結果として、全体的に大型化の傾向が促進される。三段構成土器群にあつては、第 1 段の上部が外側に湾曲気味に膨らんで「肩部」の名称が相応しい部位形態となるが、その上端に祖形 a から引き継ぐ内傾する第 2 段が接続する。その上半部には平行沈線文列が描かれて(第 2 段 a 文様帯)、下半部は無文のまま(第 2 段 b 文様帯)、文様帯としても上下に 2 区分されて、第 2 段の縦方向の拡幅化が助長される。第 1 段の上部(肩部)は平行沈線文列や波状工字文が主に描かれる第 1 段 a 文様帯である。第 3 段は斜縄文が全面的に展開する文様帯(第 3 段文様帯)で、ここも縦方向の拡幅化が図られる。以上のような積み上げ段=文様帯構成で、比較的大型の器体で平底になるのが長頸深鉢形土器 Ia 類である。それを小形化して、原則として台付となるものが鉢形土器 IIb 類であるとされてきた(図 3: Ia→IIb)。しかし両者を比べると、鉢形土器 IIb 類(図 4-3)の第 2 段は外傾する点で、長頸深鉢形土器 Ia 類(図 4-1)とは異なる。長頸

深鉢形土器Ia類にも第2段が外傾する事例が含まれているが(図4-2)、それが小形化して台付となったものを鉢形土器Ib類(図4-3)とする説明が一応成り立つ。

祖形 a から、第2段が内傾する特徴をもった積み上げ三段構成の長頸深鉢形土器Ia類へと変化する過程を理解するためには、図4-5のような存在の評価が重要である(他に瀬野:第47図1)。図4-5は須藤によって鉢形土器IIa類とされた土器であるが、適切ではない。長頸深鉢形土器Ia類の第2段(第2段文様帯[無文帯]になる)は、第1段の上端を境として、その上方に内傾しながら接続する形態的・技術的特徴を有している。それに対して図4-5は積み上げ三段構成になってはおらず、第1段の上端には第3段が外傾しながら接続する。この点を評価したのが先の須藤の分類案(IIa類)である。図4-5では外湾した第1段の上部が内側へと湾曲を変える部位が無文帯(第1段a文様帯)となっているが、その変換点を第1段と第2段との境として屈折化させたものが、内傾する第2段をもった長頸深鉢形土器Ia類である。全体的な大型化傾向のもと、第2段が縦方向に拡幅化するなかで、上述のように内傾傾向が弱まり、直立する第2段も生じてくるが、それがさらに外傾する要因は別に説明する必要がある(後述)、それらを一括して取り扱うのは不適切であると考え。鉢形土器Ib類は、まさに外傾する第2段を備えた長頸深鉢形土器Ia類(図4-2)が小形化・台付になったもの(図4-3)であると評価できる。第2段の内傾化傾向の弱まりとは逆に、内傾化を強めて、口径比率をやや小さくしたものが、一見して広口壺のような形態を呈する壺形土器IVg類(二枚橋)である(図4-6)。

積み上げ二段構成土器群では、無文帯としての第3段は口唇部に刻み目を施したり、口縁の上端に添って平行沈線文などを回らせたりするものがあるが、基本的には第3段全体を無文帯として縦方向に拡幅化する。その際に、第1段の上部が、前出の三段構成の第1段の上部と同じように外側に湾曲気味に膨らんで「肩部」の部位形態をとり、器高もやや高めで、台付となるのが鉢形土器IIa類である(図4-7)。肩部には第1段a文様帯が形成され、平行沈線文列や波状工字文が描かれる。積み上げ二段構成土器群には高坏形土器IIIa・b類も含まれるが、そのうちの高坏形土器IIIa類(図4-8)は台付か高台付かを別にすれば、台付の鉢形土器IIa類と比較的類似しているが、大形でかつ大きく開いた器形である点で両者の違いは際立っている。その差異は、高坏形土器IIIa類の第1段が外湾しながら大きく開いた作りであり、かつその上部(肩部)は外側に張り出すことなく(あるいは張り出しが極めて弱く)、その上端に第3段が同じような角度で開きながら接続されているからである。結果として、器高に対して口径(器幅)が大きく、全体的に大形の器形に仕上がっている。第1段の上部には文様帯が形成され(第1段a文様帯)、変形工字文が描かれる。このような形態的特徴と、文様との密接な対応関係をもった高坏形土器IIIa類が小振りになり、高台の代わりに台付としたものが、鉢形土器IIe・f類である。ただし、鉢形土器IIe類は高坏形土器IIIa類に比して、小形であり器高比もやや大きくなっていることもあり、第1段の上部が幾分外側に張り出した作りが目立つものがある。第1段a文様帯に変形工字文が描かれる鉢形土器IIe類(瀬野)(図4-9)は高坏形土器IIIa類を小型化したものであり、第1段a文様帯に波状工字文が施される鉢形土器IIe類(二枚橋)(図4-10)はむしろ鉢形土器IIa類が口径比を大きくしたものであり、共に台付とすることによって同じ分類枠に収まる結果になったのかもしれない。鉢形土器IIf類(図4-11)は第1段の上部の張り出しも弱くて高坏形土器IIIa類により近似したプロポーションであるが、その点を除いて第1段a文様帯を変形工字文とする鉢形土器IIe類(瀬野)とは大きく変わらない。

積み上げ二段構成土器群においても全体的な大型化傾向は進んでおり、高坏形土器IIIa類では文様帯としては無文帯である第3段の縦方向の拡幅化の結果、主要文様帯の転移が生じ、すなわち第1段a文様帯に描かれていた変形工字文が第3段文様帯へと転移し、代わってそこには平行沈線文列が描かれるようになったのが高坏形土器IIIb類(図4-12)であると理解することが可能である。

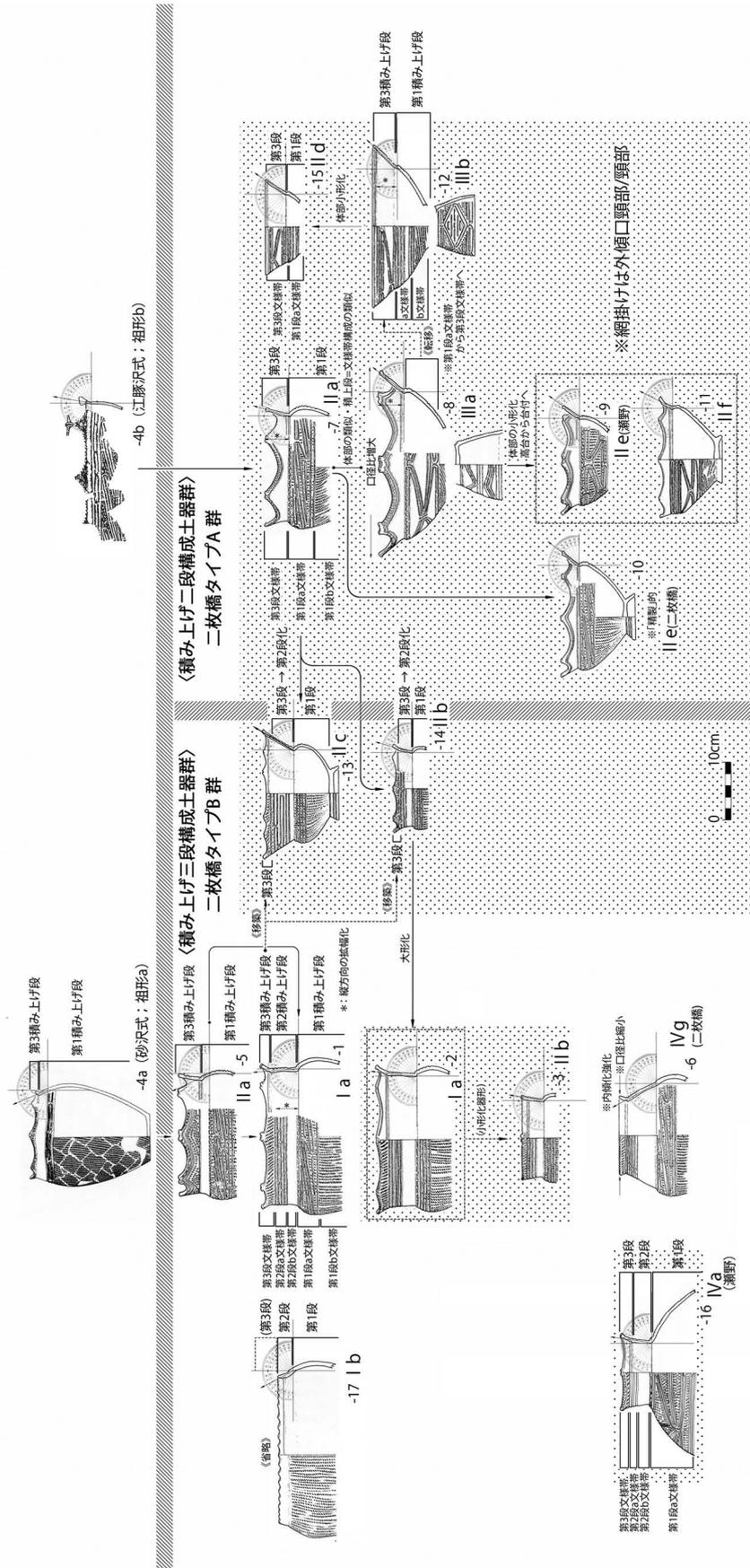


図4 二枚橋遺跡出土の二枚橋式土器の論理性：積み上げ段=文様帯構成  
 (須藤 1970、伊東・須藤 1982、工藤 1987、成田ほか編 1991 より構成)

砂沢式土器においては変形工字文と強く結び付いた「口縁、体部がほぼ直線的に開き、体部上半に変形工字文を施した鉢形土器」(須藤 1970:33) (図 3-【参考】) が特徴的な存在であったが、二枚橋式土器においては器形としては鉢形土器IIg 類(図 3-IIg) が引き継ぎながらも、そのような明確な対応関係をもった事例は希薄になる。それに代わる存在として、変形工字文と極めて強く結びついた高坏形土器IIIa 類、その発展型としての高坏形土器IIIb 類を評価することができるであろう。

外見的には積み上げ二段構成か三段構成か判別しがたいが、文様帯構成としては三帯構成をとるのが鉢形土器IIc 類である(図 4-13)。本類を須藤は「有段鉢形土器」と呼称して、「口縁部と頸部との形態的分離は顕著ではないが、口頸部と体部との分離は明瞭で段をなす」(須藤 1970:29)と説明している。詳述すると文様帯構成としては(須藤式の命名方法では)第I文様帯(斜縄文帯)・第IIa 文様帯(平行沈線文列)・第IIb 文様帯(無文帯)・第III文様帯(平行沈線文列/あるいは波状工字文)が典型的で、第II文様帯が分帯されずに全面がほぼ平行沈線文列となるような事例もある。第I文様帯に該当する口縁部形態の内側下端をやや肥厚させ、そこから口唇部先端側にかけて内面側を徐々に薄くすることによって、またそれに応じて外面側も若干外反気味になる場合もあり、観方によっては第 3 段が作り出されているような外見的な効果が生じている。このような器形が生じるためには、鉢形土器IIa 類の無文帯をなす外傾する第 3 段の縦方向の拡幅化に際して、長頸深鉢形土器Ia 類で発達した斜縄文帯となる第 3 段を継ぎ足す(移築)ことにより成立したといった過程が考えられる。元(鉢形土器IIa 類)の第 3 段が第 2 段へと変わったことになる。口縁部は平縁か突起が付着したような低い波状口縁となる。

このような斜縄文帯としての第 3 段を移築するような成形過程が生じたとするならば、前述の鉢形土器IIb 類についても別の評価が可能になる。長頸深鉢形土器Ia 類のうち、第 2 段が内傾化するものと鉢形土器IIb 類との間には、台付であることを別にすれば、大形と小形といった関係があった。しかし、長頸深鉢形土器Ia 類はその成立過程において、内傾した第 2 段が大形化(縦方向の拡幅化)する変化が生じる中で、直立へと変化しながらも、外傾化に至る(図 4-2)までの適切な要因が見当たらなかった。そこで、先のような外傾する第 3 段をもった鉢形土器IIa 類が縄文帯としての第 3 段を取り込んで大形化(縦方向の拡幅化)する(図 4-7→13)際に、外傾する第 3 段は新たに外傾する第 2 段へと変化し、新たに上積みされた第 3 段(縄文帯)との境を明確に作り出す過程があったことを想定してみよう。外傾する第 2 段を備えた長頸深鉢形土器Ia 類(図 4-2)は、自らが属す長頸深鉢形土器Ia 類の製作上の振れ幅(内傾～直立～外傾気味)の中で生じたものではなく、斜縄文帯の第 3 段を取り込んだ鉢形土器IIa 類、すなわち鉢形土器IIb 類(図 4-14)が大形化した結果生じたもの(図 4-2)であると評価できる。

なお、高坏形土器IIIb 類の体部を小形化した器形が鉢形土器IIc 類である(図 4-15)。鉢形土器IIc 類と「ほぼ同形態を示す」が、「口縁部の開きがより強く、全体に浅い器形」である(須藤 1970:32)。しかし、積み上げ段=文様帯構成の点からは鉢形土器IIc 類と明確な違いを認めることができる。

台付鉢形土器IIi 類(図 3-IIi)はこれまでに論じてきた二段あるいは三段の積み上げ段構成をとるものではなく、異質な存在である。波状工字文との対応関係が強く、描線間の空白部には全面的に刺突文が充實的に施文される特徴をもつ。既に原報告時に指摘されているように、「砂沢式の高坏との関連性が強い」(須藤 1970:24)ものである。後続の恵山式土器の中に同じ形態の鉢形土器が継続することが指摘されているが、変形工字文の系統の文様との組み合わせが強まるようで、二枚橋式土器における様相とは大きく異なってくる。

壺形土器は多様な様相を呈しているが、壺形土器IVa 類(瀬野)とされたものの中には、積み上げ段=文様帯構成において三段三帯構成(第3段文様帯[斜縄文帯]—第2段a文様帯[平行沈線文列]—第2段b文様帯[無文帯]—第1段a文様帯[主文様帯:変形工字文])のものが少数例ながら認められる(図4-16)。

以上に取り扱った深鉢形土器(甕形土器)、鉢形土器、高坏形土器の主要3形態の多くのものと壺形土器の一部(IVg 類二枚橋)のものは、須藤の指摘の通り、甕形土器に限らずとも、「砂沢式にすでに各部位が形態的に分化し、文様帯もこれに対応して形成される傾向が認められる(須藤 1970:62)。さらに二枚橋式土器においては「これらの傾向が飛躍的に強化されて展開」しており、総体的には「先行型式である砂沢式との間に密接な系統性」や「整形・施文手法、また器形において強い関連性」が認められる(須藤 1970:61-62)。その中で特異な存在なのが短頸深鉢形土器Ib 類である(図4-17)。積み上げ段構成としては一見、二段構成であり、先の命名法にしたがうならば、無文帯で内傾する第2段積み上げと、上部(肩部)が湾曲した第1段(全面に条が縦走する縄文を施文)とから成り立っているようである。しかし、観方によっては三段構成の長頸深鉢形土器Ia 類の第3段を「省略」したものとしても理解できる(図4-1→17)。類例が北海道有珠善光寺遺跡にあるが、後続する恵山式土器や田舎館式分土器には存在しないことが指摘されている(須藤 1970:28)。先に長頸深鉢形土器Ia 類の第3段(斜縄文帯)が鉢形土器IIa 類に「取り込まれる」過程(移築)を想定したが、ロジック的な説明としては、このような土器製作における認知的な操作を行ったことによって、実際に長頸深鉢形土器Ia 類の製作において第3段(斜縄文帯)を製作しない、すなわち認知的に「第3段(斜縄文帯)を切り離す」(=第2段で積み上げを終了する)ことが行われた結果、短頸深鉢形土器Ib 類が成立した、といった説明が可能になる<sup>13</sup>。

以上の結果をまとめると、二枚橋式土器における主要な器種間に働いていた論理的関係は、全体的な大形化が進む中での、〈口頸部<sup>14</sup>内傾の積み上げ三段構成土器群〉と〈口頸部外傾の同二段構成土器群〉との間における、「積み上げ段の縦方向の拡幅化」と「積み上げ段の移築/省略」「文様帯の転移」とに関するものであった。当初においては、製作技術的な違いを背景として対照的な関係にあった口頸部内傾の土器群と口頸部外傾の土器群(図4 網掛け)は、相互に干渉しながら上記のような変化過程を経て、やがて口頸部外傾の土器群の消滅をもって、この論理的関係は終わる。二枚橋式土器の段階に存在した各種の構成要素のいくつかは、後続する土器群(土器型式)の中で継続され、また残存的な存在としてある程度維持されることはあっても、このような論理的関係の終了をもって、「二枚橋式土器」としての形象的・概観的なまとまりのある1つの土器群は終わるのである。

二枚橋式の土器群において口頸部外傾の積み上げ二段構成土器群には、最も華やかな作りの高坏形土器が含まれ、それは同構成の土器群の他の器種や併存する三段構成土器群の各器種との製作技術上並びに形象上での強い関連をもつ存在であった。一方でそれは、先行土器型式である砂沢式土器における同じ器種の高坏形土器よりも、むしろ変形工字文と強く結びついた浅目の鉢形土器(図3-【参考】)の「役割」に近いものであったのではないだろうか。二枚橋式土器における高坏形土器を含む口頸部外傾の二段構成土器群の出現と後続土器型式における消失は、その「役割」に大きな変更があったことを予測させる。そのような変化が実際にあったとして、それは「現象としての土器型式」(ある土器が特定の土器型式であること、およびその根拠)と一致することはあっても、編年研究における「特定の時間的・地理的な単位としての土器型式」間の区分(線引き)にとつてどこまで有効かは難しい判断を要する。とりあえずは、時期区分の指標となりうる限られた数の要素に加えて、論理的関係を明らかにすることは、隣接する双方の「土器型式」の把握・理解・判別にとつては有効であると考えられる。

## V. 土器型式非在論

### (1) 在地製作と在地系統

在地製作の土器といったら、その土地で製作された土器を意味する。では、在地系統の土器といった場合は何を意味するだろうか。取り扱う時間幅が比較的短い場合は、「在地系統の土器」は並存する他の土器型式圏からの搬入土器や、それらの要素を取り入れた異系統在地製作土器などに対比される意味合いで使用されることが多い。この場合、「搬入土器」の用語が相対的である(逆方向から見れば「搬出土器」である)のと同様に、「在地系統」も相対的な意味をもつ。では、取り扱う時間幅が長い場合はどうなるであろうか。その土地(地域)において代々作り続けられてきた伝統的特徴を引き継ぐ土器、といったニュアンスが強くてくる。

特定の時間的・地理的な単位である土器型式は、山内清男による土器型式編年の方法論的特性によるためでもあるが<sup>注15</sup>、時間的・地理的に隣接するもの同士が比較的類似しているという現象が経験的にもよく知られている。研究史的にそれらは「型式群」(岡本勇)や「様式」(小林達雄)として捉えられることがあった(小杉1995:75)。あるいは「〇〇系土器群」などと呼ばれることもあった。それこそが「その土地(地域)において代々作り続けられてきた伝統的特徴を引き継ぐ土器」のことであり、ある程度広域な特定の地域と結びついている。それらの「〇〇系土器群」の地理的な広がり、その意味では固定的であり、その時空の範囲内に属する各種土器群(土器型式)を「在地系統」と表現することは妥当である。しかし、「〇〇系土器群」と「××系土器群」との境界領域を問題とする場合はどうだろうか。それぞれの「系土器群」が存続している期間中に、その地理的広がりには変動があることも、多くの事例で確認することができる。その境界領域はそれほど広くない場合もあるが、相当な広がりである場合もある。いずれにしてもそのような境界領域にあたる地域において「在地系統」の用語は意味をなさなくなる。なぜか。道南地方といった地域空間(北海道島超越的地域VI)(図2の上)を一例として、その理由を考えてみよう。

この地域は縄文文化のかなり早い段階から、東北地方ないしはその北部に空間的な中心域をもつ複数の「系土器群」(円筒土器下層式・上層式系、磨消縄文系、亀ヶ岡式系など)と、「北海道島中央部/東部/北部系土器群」(道央及び以東・以北で展開した各種土器群(土器型式)を「系土器群」とまとめられるかは問題ではあるが、通時的に展開した「北海道島中央部/東部/北部系土器群」としてここでは捉えることとすると)とが、交互とまでは言わないが、それぞれの分布圏を広げたところである。それに関して、例えば次のような説明がなされている。問題とする道南地方の続縄文期初頭について「...これらの土器(引用者補注:「二枚橋式相当の土器」のこと)には横走縄文が施された在地の土器が伴うことが多いのが特徴であり、続縄文時代初頭に道南地方まで広がった大狩部文化が母胎になっていることがうかがえる」(工藤2004:154)といった説明である。ここでの「在地の土器」とは「在地製作」の意味だけではなく、「在地系統」の土器の意味となっている。また、「土器系統の交替(在地系→恵山系)をとまなう型式圏の拡大という現象」と表現された際の「在地系」とは、「北海道在地系統土器群」あるいは「道南部北海道在地系土器群」などが念頭におかれている(高瀬1998:23)。これらの例からも明らかのように、道南地方が「北海道という地理的まとまりの一部である」ということは(われわれにおける先験的な了解事項)なのであり(これを「北海道バイアス」と呼ぼう)、例えば数百年にわたって円筒土器下層・上層式系や亀ヶ岡式系の土器群がこの地域空間で在地製作されたとしても、それらが在地系統土器と呼ばれ、評価されることはないのである。このことが前述の「狭間の土器群/端境の土器群」の理解においてどれだけの障害になっているかは、自覚しない限り克服できない課題である。

### (2) 精製・粗製土器と模倣土器

精製土器、粗製土器の用語法は、1930年頃からの山内清男の論文の中で明確にされ始めてくる。当初は亀ヶ岡式系土器における「精粗二様の製作」になるものであった。精製土器は「土質細密、薄手で一般に小形に傾く。器形は鉢形が多数を占めるが、他に皿、浅鉢、壺、急須、稀に香炉形等がある。器面の調整は縄紋のない部分に於ては甚だ良好であつて、通常光沢に富んで居る。文様を加えられることが多く、全く無紋又は縄紋の場合は尠い」(山内 1930〔1967 再録:115〕)といった内容である。粗製土器は「土質砂粒に富み、より厚手、より大形に傾く。鉢形が大多数、他の器形は稀である。表面の調整は粗末で、文様の加えられないものが多い。加えられる場合でも精製土器に較べて簡単なものである」といった説明が続く。対照的な製作(胎土・成形・調整)・器種・規模・装飾(文様)の違いが述べられている。明記されていないが、使用状況における違いも考慮していたことが推察される。

では、二枚橋式土器における精製・粗製土器の捉え方はどうなっているだろうか。まず、標式遺跡の二枚橋遺跡出土土器群を報告し、この土器型式を提唱した須藤の記述の中に興味深い指摘がある。「縄文晩期の亀ヶ岡式土器では一般的に『粗製土器』(山内 1930)の概念でほぼ統一して扱われる煮沸形態に関しては、二枚橋遺跡出土の資料の場合、長頸甕形土器、二次的加熱の著しい台を有し、炭化物が附着する鉢形土器 a 類に見られるように、径 1.0 耗を越す粗い砂粒は殆んど含まれておらず、精良な胎土を有する。したがって、この土器群には『精製』、『粗製』の概念は必ずしも当てはまらない」(須藤 1970:14)という内容である。また、二枚橋遺跡出土の甕形土器『瀬野報告』の「深鉢形土器」に相当)に対して「煮沸形態としては極めて装飾的であり、縄文晩期終末期の大洞 A' 式、砂沢式、あるいは東北地方中、南部の初期弥生式土器の甕形土器とは著しく異なっている」(須藤 1970:28)と説明を加えている。山内の定義に対して、胎土への着眼点に基づき、容器としての機能性の点に重点を置き、あわせて装飾性に対する配慮を行ったうえでの同用語の使用、それに基づく対象の把握となっている。

一方、同じ二枚橋土器に対して、高瀬克範は当初は「口縁・頸・胴の区分が不明瞭あるいは頸部無文帯のないものを粗製、それ以外を精製としてあつかう。したがって、この基準は縄文晩期のような単位文様の有無による区分とは異なる」(高瀬 1998:39)といった、独自の定義、解釈のもとに使用している。その後の論考では、そのようにして捉えた二枚橋式土器の「粗製土器」の一種、「口縁部に無文帯を設けつつも単位文が付されない一群」(須藤の Ib 類〔短頸深鉢形土器〕の一部を念頭においている)が「北海道島全域から本州島東北部まで広く分布する」といった理解のもとに、恵山式土器の成立期前後の様相を次のような 2 点をもって結論付けている(高瀬 2005:64)。

- 1)「下北半島と北海道島では恵山式成立期以前の段階にすでに粗製土器に共通要素が含まれている」
- 2)「恵山式成立期についても、口縁部無文帯深鉢という共通の組列にくわえて、それ以外のローカルな組列の粗製土器、さらに大洞 A' 式～二枚橋式の精製土器もしくはその系譜化にある土器、の3者によって型式が構成されている」

ちなみに「ローカルな組列の粗製土器」としては「下北半島の口縁内面肥厚深鉢、石狩低地の口縁部外面で地紋の条が横走る深鉢など」(高瀬 2005:67)が例示されている。また、何を基準としているのかは不明であるが、「半精製の深鉢・鉢」(高瀬 2005:67)などといった使われ方もしている。

さらにこれと関連して、土器型式の設定に関して次のように述べている、「北海道島の二枚橋式を恵山式に含める考えは、型式区分の基準として粗製土器の地域差を精製土器の共通性よりも優先させているうえに、下北半島との比較から『地方差』が土器全体に及ぶ時期を見定めていないという問題がある。また、型式があくまでも『地方差』と『年代差』を示す単位である以上、区分された型式の系統関係は型式区分とは別次元の問題

である」(高瀬 2005:67)と。先に整理・指摘したように、道南地方の縄文期初頭の土器群をどのように捉え、呼称するかには多くの研究者が苦慮してきた。実際に北海道島側の当該土器群に対して「二枚橋式ないしその併行型式」(菊池)、「二枚橋式に類似した資料」(石本)、「二枚橋式相当の土器」(工藤)などと表記しているのは、地域差をもった「粗製土器」が含まれているからということよりも、それが弥生土器か否かといった問題に抵触しかねないから、といった側面が強いからではないだろうか。山内が当初提示した「縄文土器型式の大別と細別」編年表(1937年)には地域区分(「先験的地域区分」として本州島よりも北の地域には「渡島」としか記されていない。当時の研究状況を反映したものであるが、その後、調査・研究が進展するなかにおいても、北海道島にはどの程度の地域区分枠を設定するべきなのかについては、先の「道南」や「道央」、「道東」などといった慣用的な地域認識に頼りながら、それ以上の検討は具体的になされることがなく、個別の遺跡における出土状況に依拠しながら、やや乱立気味に「土器型式」が提唱されるきらいがあった。この傾向は特に縄文中期では顕著である。以前に菊池徹夫が指摘したように「さまざまな型式、とりわけ南の大洞式系と北のヌサマイ式系とが複雑に影響し合い、移入品たる精製土器と地元産で縄文の目立つ半精製、ないし粗製土器が融合しつつ、やがて新たな土器群が生み出されていく」(菊池 1984:64)といった状況が実際にあったからかもしれない。先験的地域区分の枠組みに依拠できないからには、特定の分布圏を提示しなければ成立し得ない「土器型式」が量産された背景である。

いずれにせよ、この引用文においても「精製土器」「粗製土器」の用語が使用されている点が象徴的である。大坂拓は「噴火湾北岸の豊浦町礼文華遺跡等では道央部と類似する粗製土器を伴うことから、異系統共存の状況を根拠として、現在でも北海道の『恵山 1 式』とする見解もある。ただし、道央部と類似した土器群の分布は渡島半島全域に及んでおらず、礼文華遺跡の状況は土器型式分布圏の境界に位置することに由来する」(大坂 2015:452)といった説明もなされている。先に問題とした「在地系統」と粗製土器とが密接に関連しながら議論が展開されている。高瀬のように〈ある程度の広域性をもった「粗製土器」〉と「ローカルな粗製土器」、やはり〈ある程度の広域性をもった「精製土器」〉、以上の 3 者が共存する状態を「型式構造」として捉えたところで、前 2 者の粗製土器の内容が具体的に検討され、精製土器も含めて、相互の関係が明らかにされない限り、その間に資料は増加したとはいえ、早くに菊池によって指摘された内容の深化が遂げられたとはいえない。

山内が提示した縄文晩期の精製土器・粗製土器の概念(用語)は、対照的な製作・器種(機能)・規模・装飾(文様)の諸点を考慮したものであった。縄文土器発達史を概観すると、確かに早い時期から 1 つの土器型式の中に描出された「文様」で飾られた土器と、縄文などの「地紋」のみの土器とが併存している状態を確認することができる。研究者によってはそのような事例にも精製・粗製の用語を用いるものもいるが、両者の間に胎土・成形・機能性(煮沸など)の点で、明確な違いは見いだせない場合が多い。山内が指摘する諸点において精製・粗製の区別が明確になるのは、縄文後期に入ってからであり、それは精製・粗製が分化したというよりも、例えば堀之内 2 式土器や加曾利 B 式土器における黒色磨研技術で製作された「精製土器」が新たに作り始められることによる。これらの「精製土器」においては、器種にもよるが、鉢形・深鉢形系統の器種のものには煮沸・被熱痕跡が認められるものも多く、物理的な機能性の側面で「粗製土器」と区別するのが難しい。精製土器・粗製土器の概念(用語)は、縄文土器発達史における後半期の土器群を分析するうえで、魅力的であり、また有効的でもあるが、提起された時点で特定の土器群ないしは土器型式を念頭においたものであり、またその着眼点が複数にわたるため、自らその用語・概念を使用する際はその定義内容を確認するだけでなく、それらの使用によって何が見えてくるのか、語り得るのかを自覚すると共に明示しなければならないと考えている。

筆者は精製・粗製の概念・用語を用いて土器型式の構造なるものを議論するのではなく、個々の遺跡あるいはその内容を敷衍することができる程度の広がり的小地域を対象として、その「土器群構成」を復元することをもって土器研究を進めている。その際に使用する重要な概念・用語の1つである模倣土器や模倣製作は、通常の定義・使用方法とは異なるものである。あらためて紹介するならば、「5項目(引用者補注:①胎土、②器形、③成形技法、④文様帯構成並びに文様構成、⑤施文技法)のどれか1つ以上に他型式の表現形式が用いられている場合、それを模倣品と規定する」(小杉 1984:160)という内容になる。また、本稿で取り扱った土器型式における論理性とは、主に「在地製作」のメジャー・タイプの土器における論理性であって、それが模倣様態などの各様態のマイナー・タイプの土器に対してどの程度影響を与えているのか、あるいは逆に「模倣製作」の過程を経て取り込まれた外来的な要素が、メジャー・タイプの論理性に影響を与えたり変容を引き起こしたりすることがあり得るのかなどを確認することによって、土器群の成り立ちを考察している。

例えば高瀬は、二枚橋式土器の成立過程を説明する際に、二枚橋式古段階の先行型式にあたる「江豚沢式」や砂沢式との関係を次のように述べている(高瀬 2005:63)。

1) 二枚橋式古段階の「文様帯構成の類似資料は、むしろ津軽平野・馬淵川下流域や北海道島南部で安定的に認められる。それは「砂沢式の粗製・半精製鉢類や『尾白内Ⅱ群』などの文様構成」である。

2) その文様構成に「下北半島独自の膨らみをもった肩部がとりこまれて二枚橋式の中心的器種が成立した」。1)で述べている「砂沢式の粗製・半精製鉢類」(図 4-4a 参照)や「尾白内Ⅱ群」(図 5-6 参照)とは、先の型式構造における(ある程度の広域性をもった「粗製土器」)に相当するものになるだろう。また、2)の肩部が膨らみをもった資料とは、「幅が狭い頸部無文帯と肩部の膨らみがあり、口縁部に平行沈線とキザミが認められるが、地紋を欠いている」土器であり、『江豚沢式』のなかでも極めて少数なものであると説明されている(高瀬 2005:63)。自らも認めざるを得ない、点と点を繋げて、変化の方向を示す線を描き出そうとする説明では、実際の遺跡の中で展開した過程を具体的に描き出すことができない。

これに対して筆者は、砂沢式併行期において、北海道島ゾーンⅥにおけるエリア6や9では、大狩部式系土器などと呼称されることのある、口縁部に水平方向に展開する縄文原体側面圧痕文を施す文様帯をもつ土器(縄線文系土器:図 5-11, 図 6-7)をはじめとする器面全体を縄文施文する各種の土器(口縁部直下を、狭幅の無文帯(図 6-6)や横走縄文帯(図 5-10)にしたり、そこに突瘤列(図 5-12, 図 6-8)をめぐらせたりする)が在地製作のメジャー・タイプとして存在し(それらの一部はゾーンⅤやゾーンⅢ以东からの移入土器の可能性もあるが)、その製作者たちが砂沢式の図 5-16・3 のような狭幅の頸部無文帯とその下帯に縦位連結部を伴った平行沈線文列をもつ土器を模倣製作(図 5-6, 図 6-1)した、あるいはその土器の構成要素を一部取り込むような模倣製作を行った(図 5-7~9, 図 6-2~4)、と評価している。このような模倣製作による集団関係の対処方法は北海道島ゾーンⅥ内の各エリアで緩やかな一定の方向性を示しながらも、それぞれの特徴を保ちながら進行していった状況が想定される。これまでに言われてきた砂沢併行期における道南地方の「青苗 B 式土器」や「尾白内Ⅱ群土器」などといわれるものが並立する状況はそのあらわれであろう。その際に、模倣製作に必要な砂沢式の有文土器の情報がいかなるかたちで取得、受容されたのか、土器そのものからか、製作者自身からなのか、またそのプロセスは具体的にどうだったのか、これらの疑問については個々の遺跡やエリア毎を単位とした検討が必要になってくる。ゾーンⅥ内のエリア3に位置する国立療養所裏遺跡では出土量は多くはないが、砂沢式を構成する土器(図 5-16)がメジャー・タイプとして在地製作されていた可能性があり、そうであるならば砂沢式土器圏をエリア3まで含めて捉えなおすべきなのか、あるいは津軽海峡を越えてコロニー的な集団移住がなされた結果なのか、同エリア内の他遺跡や周辺エリアでの調査の進展が待たれる。

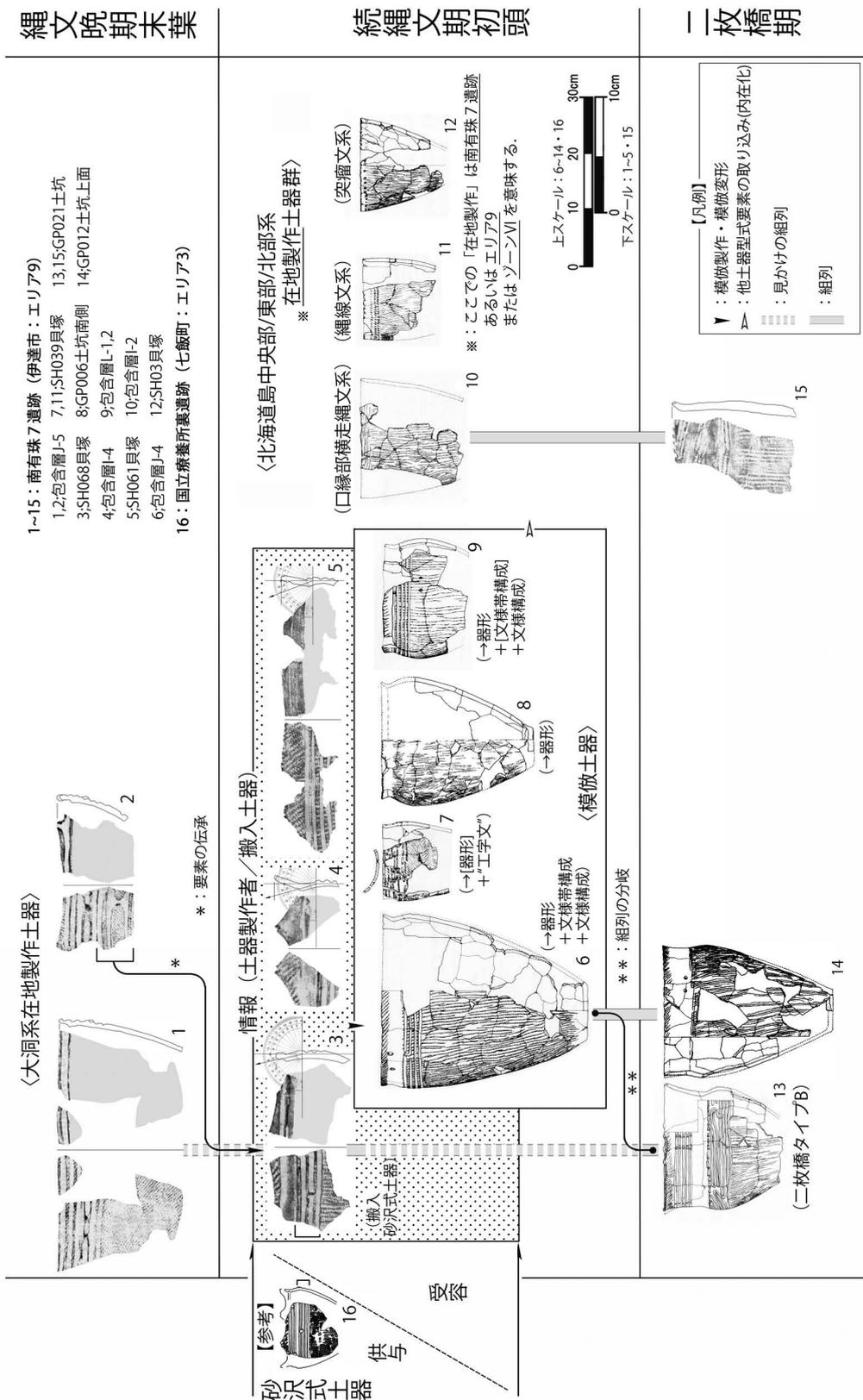


図5 南有珠7遺跡の土器群構成: 縄文晩期末葉~二枚橋期 (峰山編1984より構成)

やがて、ゾーンVI内のエリア3や8、9でも、本州島側の下北半島地域を中心に進行した砂沢式土器から二枚橋式土器への変化過程と同じような歩調で口縁部無文帯をもつ二段構成土器群(二枚橋タイプ A 群)や頸部無文帯をもつ三段構成土器群(二枚橋タイプ B 群)がメジャー・タイプとして在地製作されるようになるが、それらが前段階の模倣製作された土器から続く組列に属するのか(図 5-6→13)、この段階にいたって「まるごとの模倣製作」に近似した土器製作が可能になるような集団関係が成立したためなのか、その具体的な検討は現在整理作業が進行している礼文華遺跡の発掘調査報告書の中で検討したい。

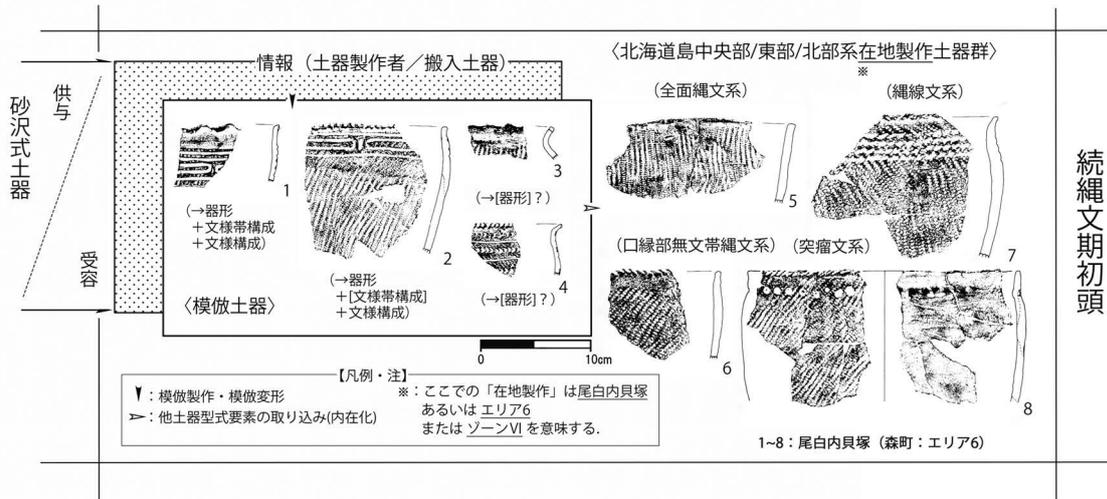


図6 尾白内貝塚の土器群構成：続縄文期初頭（千代ほか 1981 より構成）

### (3)土器型式非在論

近代日本における考古学の土器研究の歴史においては、土器型式の変化(交代)をもって時間の推移を認識・表現してきた(①)。そのような研究成果を受けて、現在では純粋な時間的な枠組みをあらかじめ設けて、それぞれの時間的な枠組み(時間単位)の中にかなる土器が属するかを検討できる段階に入ったと評価できる(②)。誤解を恐れずに図式化して簡略に表現すると、

①:A 式土器(タイプ a1・タイプ a2・タイプ a3)⇒B 式土器(タイプ b1・タイプ b2・タイプ b3)⇒C 式土器(タイプ c1・タイプ c2・タイプ c3)⇒...

②:時期 I (タイプ a1・タイプ a2・タイプ a3)⇒時期 II (タイプ b1・タイプ b2・タイプ b3)⇒時期 III (タイプ c1・タイプ c2・タイプ c3)⇒...

である。これは単に「〇式土器」を「時期〇」に置き換えただけのことではない、あるいは置き換えただけのことであってはならない。

後者(②)の場合、研究の進展に合わせて、例えば、

時期 I (タイプ a1・タイプ a3)⇒時期 II (タイプ b1・タイプ b2・タイプ b3・タイプ a2・タイプ c1)⇒時期 III (タイプ c2・タイプ c3)⇒...

といった処置を行うことが可能になる。これは前者(①)の場合でも行われてきたことである、との反論もありそうだが、実際には意味合いが異なる。前者の場合、例えば A 式土器はタイプ a1・タイプ a2・タイプ a3 の総和であって、それぞれの内容(様相あるいは外貌)が A 式土器に反映されているとした前提である。タイプ a2 を B 式土器の定義に繰り入れるといった操作は、A 式土器や B 式土器の定義内容や範疇そのものを弛緩させ、あるいは瓦解させかねない行為である。しかし、実際にはそのような手続きが実施されることもある。それはまさ

に前述のように、縄文土器をはじめとする日本における先史土器の研究段階が、純粋な時間枠を設定し、そこに該当する土器(タイプ)を充填するという段階に入ったことのあらわれである。当面はこれまで通りの「土器型式」名表示を用いながらも、それに向けての実践と実績を積み上げてゆくのがよいのではないだろうか。

本稿で取り扱った「土器の論理性」とは、上の例で説明すると、A 式土器(タイプ a1・タイプ a2・タイプ a3)や B 式土器(タイプ b1・タイプ b2・タイプ b3)、C 式土器(タイプ c1・タイプ c2・タイプ c3)においてそれぞれ完結するものなのか、あるいは時期Ⅰ(タイプ a1・タイプ a3)や(タイプ b1・タイプ b2・タイプ b3)、時期Ⅲ(タイプ c2・タイプ c3)のそれぞれにおいて完結するものなのか、おそらくはケース・バイ・ケースであろうと予測している。土器型式間の時間的区分の1つの指標として有効な場合もあるかもしれないが、そのように見出された論理性は問題とする土器群から読み取れた1つの現象として、そのことが維持されてきたことの意味や意義を解釈することが必要になってこよう。

最初に述べたように縄文土器研究にあって土器型式は特定の時間と地理的な単位として設定された。以上のように仮に純粋な時間枠をもって土器型式に置き換えたとしても、地理的な問題が残ることになる。地理的問題とは、研究史的には「土器型式における先験的地域区分の問題」の別名でもあるが、筆者はかつて時間的問題と地理的問題とを共に解決できるような土器型式とはいかなるものであるかを探求した(小杉 1995)。しかし、結果として言えたことは、土器型式における先験的地域区分の問題は、土器型式の問題としてではなく分布論の問題として解決しなければならないという考えに至った(小杉 2008b:37)。すなわち、土器型式編年の研究において、先験的地域区分は方法的に妥当なものであり、言葉をかえれば、通時的に区割りされた空間を設定して(前提として)、その中で先の純粋な時間枠を設定するべきであると考えた。これまでに土器型式として捉えられてきたもの、認識されてきたものは、土器において時間と空間との広がりをもって生じた1つの類似現象を捉えようとしたものである。それらは、研究の初期段階にあっては時間的・地理的な単位を表示するものとしてある程度有効に機能したが、形や大きさが様々に異なる積み木を積み上げたのでは、壮大な構造物は構築できないといった例えを引くまでもなく、現在の研究状況は次のステージに入ったのである。純粋な時間枠としては、いくつかの手順を踏まないといけませんが、理化学的な年代測定法の精度が飛躍的な前進を遂げた現在にあっては、100年とか50年、10年といった暦年代に結びつけた時間枠を使うことが可能になってきた。通時的に区割りされた空間としては、問題とする先史文化ごとに「超越的地域」(小杉 2023:105)というのを見出して、その境界を利用するのがよりよい選択だと考えているが、語弊を恐れることなく極端な話をすれば、都道府県単位であってかまわないのである。暦年代によって等間隔区分された時間軸と超越的地域による(あるいは便宜的な区分による)空間軸との透明な格子目を、対象とする考古文化に覆いかぶせ、格子目の中にはいかなるタイプが充填されるかを明らかにし、全体を俯瞰して「土器型式現象」を読み取ればよいのである。土器型式現象とは「これまでに土器型式として認識されてきた、土器において時間と空間との広がりをもって生じた1つの類似現象」のことであり、また別のところでは「土器にみられる共通した文様や器形の特徴が、ある一定の空間的な広がりの中に同時に存在し、かつ同一方向に同一歩調で変化する傾向や、土器型式圏と認定される広がり、時間の経過とともに異なる土器型式圏に分割されたり、それとは逆に異なる土器型式圏どうしが一つのそれへと統合されたりする現象」(小杉 2008a:67)と定義した内容に近いものである。いかに問題を設定するかによって、実際には土器型式現象以外の現象も読み取れるはずであり、例えば広域土器型式圏群などもその一例である。

## おわりに

ここに論じた土器型式非在論は、かつて大井晴男が指摘したような「土器群における型式論的変遷が複数の要素のそれぞれに漸移的な変化の集積の結果である」、ゆえに『年代学上の単位』としての『型式』の制定、それを利用した『型式編年』論は、ある矛盾を内包するものであり、方法論としては有効ではありえない(大井 1982:33)、ということではない。

山内清男が縄文土器編年研究の大綱を示した頃に、「縄紋土器の細別型式は資料の吟味によって決定され、実在し、動かし得ない筈のものである(山内 1939[1967 再録:39])と述べたことがあった。晩年に至り、「土器の地方型の存在状態は、住民が数百人(時には数十人から千人以上)の人員からなる多数の部族に分かれたれ、その若干が同一の土器型式を用いるということを想像すれば理解しやすいだろう。あるいは民族を言語学的群に分かつことと似ているといってもよいであろう(山内 1964[1969 再録:115])」といった解説を与えているが、そもそも土器型式が提唱された当初は、「地方差、年代差を示す年代学的の単位(山内 1932・33[1967 再録:2])であった。それが「実在し、動かし得ない」のは、「実体」として存在するからではなくて、その文節に続く一節、「大別は便宜的なものである(山内 1939[1967 再録:39] 傍点は引用者)を述べるための対句的な表現であると理解される。「年代的組織」として等間隔時間区分の目盛りを微分的に細分することによって、相対編年表を絶対編年表に変換することを構想していた山内にある(小杉 2008b:24)、今日に至る先史土器研究の推移・成果を受けて、細胞壁のような「土器型式」の枠組み自体を解体する算段を講じるのではないだろうか。

## 注

(1) 礼文華遺跡第3次調査に関連した既発表の報告・論考として、次のものがある。

小杉 康・高瀬克範・渡辺つづり・神田いずみ 2015「北海道虻田郡豊浦町礼文華遺跡の第3次調査第1～3シーズン概要報告」『北海道考古学』51:85-94

小杉 康 2016「続縄文期前半における礼文華遺跡の銚頭」『北海道考古学』52:1-18

小杉 康編著 2020『礼文華遺跡第3次調査:遺跡範囲確認調査の記録』北海道大学大学院文学研究院考古学研究室・札幌

(2) 本稿は小杉(2017)の続編となる。

(3) 高瀬(2005)では比較対象が瀬野遺跡堅穴住居址覆土出土土器群であることが示される。

(4) 「口縁部無文帯深鉢」とは後出の須藤(1970)の甕形土器b類(短頸甕形土器b類)または伊藤・須藤(1982)の深鉢形土器Ib類(短頸深鉢形土器)のことである。

(5) 高瀬(1989)では「尾白内II群」としている。

(6) 口縁部／頸部／胴部／底部などの用語法に対して、須藤(1970)では「体部」をほぼ「胴部」の意味で使用している。本稿でも須藤関連の記述の際にはそれに倣うが、器台や高台を取り付けた器形の土器に対しては、文脈から間違いなく読み取れる範囲において特に断ることなく、台部に対してそれよりも上部の全体を表示するものとしても「体部」を使用する。

(7) 本文では「台付深鉢形土器」(須藤 1970:28)と表記しているが「台付鉢形土器」の誤記と判断した。

(8) 『二枚橋報告』では波状工字文、『瀬野報告』では変形工字文が各事例として提示されている。

(9) 『二枚橋報告』では「鉢形土器 a~d 類」(須藤 1970:17)と記載されている。

(10) 福田正宏は波状文(「波状工字文」)を縄文晩期の大洞 C2 式に遡る「入組文」からの変遷上に位置付けている(福田 1997)。また、高瀬は「波状文の変遷速度に地域差があり、モチーフ・描出技法ともにより古い波

状文が下北半島で維持されている」(高瀬 2005:64)と考えることによって、一見型式学的に逆転しているように見える砂沢式の曲線的に表現される「波状文」と二枚橋式の直線的に描かれる「波状文」(波状工字文)との差異を説明している。

- (11) 二枚橋遺跡の鉢形土器 g 類では該当する資料は無いが、瀬野遺跡では IIg 類(鉢形土器)で変形工字文が描かれる事例がある(伊東・須藤編 1982; 第 35 図 1~3)。
- (12) 台部、高台部は含めずに数える。
- (13) 高瀬は、須藤が短頸深鉢形土器 Ib 類とした土器を、「口縁部に無文帯を設けつつも単位文が付されていない一群」として「口縁部無文帯深鉢」と呼称して、「北海道島全域から本州島東北部まで広く分布した粗製土器の一種」と捉えている(注 4 参照)(高瀬 2005:64)。確かに、指摘されたような特徴をもった土器が礼文華遺跡第 3 次調査においても出土しているが、しかしながら全般的にやや厚手の作りとなり、第 1 段上部の張り出しと内面に明瞭な稜を作って内傾する第 2 段とからなる短頸深鉢形土器 Ib 類とは、製作技術的にも様相が異なっている。
- (14) 「口頸部」は須藤(1970)の中でも使用されている用語であるが、本稿でも口縁部と頸部とを合わせた総称として、また器種間の比較検討をする際に一方において口縁部と頸部との区分が明瞭であり、他方においてその区分がはっきりとしない(どこからが口縁部でどこからが頸部か、あるいは頸部を欠く)場合などにも、その対象部位の表記として用いる。
- (15) 先験的な地域区分に依拠して土器型式を設定するために、地域区分が異なれば非常に近似した土器型式同士であっても別名称の土器型式として編年表に記載されてしまう(例:諸磯式と南大原・上原式、など)(小杉 1995:74)。

## 引用・参考文献

- 石本省三 1984「北海道南部の続縄文文化」野村編『北海道の研究 第 1 巻 考古篇』所収:319-354、清文堂・大阪
- 石本省三ほか 2000『国立療養所裏遺跡発掘調査報告書』七飯町教育委員会
- 伊東信雄・須藤 隆編 1982『瀬野遺跡—青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究—』東北考古学会・仙台
- 大井晴男 1982「土器群の型式論的変遷について(下)」『考古学雑誌』67(4):28-47
- 大坂 拓 2007「恵山式土器の編年—北海道島南部における続縄文時代前半期土器編年の再検討—」『駿台史学』130:53-83
- 大坂 拓 2010「続縄文時代前半期土器群と本州島東北部弥生土器の並行関係」『北海道考古学』46:89-104
- 大坂 拓 2015「IV.各地の弥生土器及び並行期土器群の研究—8.北海道(南部・中央部)」佐藤編『考古調査ハンドブック 12 弥生土器』:447-473、ニューサイエンス社・東京
- 菊池徹夫 1984『北方考古学の研究』六興出版・東京
- 朽木 量 2023「第 3 章 時間をよむ」佐々木・他編『はじめて学ぶ考古学(改訂版)』:53-77、有斐閣・東京
- 工藤研治 2004「続縄文文化の土器」大沼編『考古資料大観』第 11 巻:153-164、小学館・東京
- 工藤竹久 1987「東北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72(4):39-68
- 小杉 康 1984「物質的事象としての搬出・搬入、模倣製作」『駿台史学』60:160-172
- 小杉 康 1987「樋沢遺跡押型土器群の研究」戸沢編『樋沢押型土器群調査研究報告書』:79-128、岡谷市教育委員会
- 小杉 康 1995「土器型式と土器様式」『駿台史学』94:58-131
- 小杉 康 2001「縄文時代の集団と社会組織」高橋編『現代の考古学6 村落と社会の考古学』所収:115-134、朝倉書店・東京

- 小杉 康 2008a「縄文文化における黒曜石の採掘と流通」高濱編『現代の考古学 4 生産と技術』所収:115-134、朝倉書店・東京
- 小杉 康 2008b「土器型式編年の基礎概念—山内清男・モンテリウス・チャイルド—」小杉・他編『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—』所収:23-41、同成社・東京
- 小杉 康 2009「北海道の縄文集落と地域社会」鈴木・鈴木編『縄文集落の多様性I 集落の変遷と地域性』所収:11-50、雄山閣・東京
- 小杉 康 2017「続縄文期初頭の土器群構成について—土器群構成分析法のすすめ(上)—」『北海道考古学』53:131-152
- 小杉 康 2023「第4章 空間をよむ」佐々木・他編『はじめて学ぶ考古学(改訂版)』:79-106、有斐閣・東京
- 佐原 真 1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座 日本歴史1原始および古代1』所収:113-182、岩波書店・東京
- 佐藤 剛 2022「ユベオツ(続縄文)時代の概説」『道南日本海側の続縄文時代を学ぶ—南川遺跡の出土遺物から—』所収:1-46 相当、南北海道考古学情報交換会・厚沢部町 (<https://ishijunpei.github.io/dkouko2020/report/satou/merge.pdf>)
- 須藤 隆 1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56(2):10-65
- 高瀬克範 1998「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』34:21-41
- 高瀬克範 2005「恵山式成立前後の型式細分と系統関係」石川編『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年(科研B2 研究成果報告書)』所収:63-72、明治大学・東京
- 高橋正勝編 1980『アヨロ遺跡—続縄文(恵山式土器)文化の墓と住居址—』北海道先史学協会・札幌
- 高橋正勝 1984「北海道中央部の続縄文文化」野村編『北海道の研究 第1巻 考古篇I』所収:355-384、清文堂・大阪
- 千代 肇ほか 1981『尾白内』森町教育委員会
- 成田正彦ほか編 1991『砂沢遺跡発掘調査報告書—本文編—』弘前市教育委員会
- 林 謙作 1990「素山上層式の再検討—M・Y・I の主題による変奏曲—」『考古学古代史論叢：伊東信雄先生追悼』所収:105-162、伊東信雄先生追悼論文集刊行会・仙台
- 深澤芳樹 1986「弥生時代の近畿」『岩波講座 日本考古学 5 文化と地域性』所収:157-186、岩波書店・東京
- 福田正宏 1997「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』63:36-57
- 水ノ江和同 2020「縄文文化を境界から考える—日本列島の外と内—」『季刊考古学』150: 59-62
- 峰山 巖編 1984『伊達市南有珠7 遺跡発掘調査報告』伊達市教育委員会
- 家根祥多 1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』所収:49-78、帝塚山考古学研究所・奈良市
- 山内清男 1932・33「日本遠古之文化」『ドルメン』1-4-2-2〔1967『先史考古学論文集』第1冊再録:1-36〕
- 山内清男 1939「補注」『日本遠古之文化-補注付新版』先史考古学会・東京〔1967『先史考古学論文集』第1冊再録:37-44〕
- 山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本原始美術 第一巻 縄紋式土器』講談社・東京〔1969『先史考古学論文集』新第3集再録:97-137〕
- 吉崎昌一 1982「下添山遺跡」梅原編『北海道における農耕の起源(予報)—文部省科学研究費による』:4-12、札幌大学・札幌

Theory on non-existence of pottery styles:  
Recommendation of analytical method for a pottery group composition  
associated by site or layer, Part2

KOSUGI Yasushi

**Abstract:** Nimaibashi-style pottery has been established as one of the earliest pottery styles of the Yayoi culture in the northernmost region of Honshu Island, and its chronological position has been determined. Similar pottery groups of this style are also known to exist in the southwestern region of Hokkaido Island, which is located across the Tsugaru Strait. Many archaeologists have hesitated to identify these pottery groups as Nimaibashi-style pottery because such a judgment is equivalent to evaluating that the spatial spread of Yayoi culture extended to Hokkaido Island. The questions raised by these pottery groups located in temporal and spatial boundary areas go to the core of the fundamental questions in prehistoric pottery research, such as "What is a pottery style?" "How can it be recognized?" and "How does it change?" In this paper, I use Nimaibashi-style pottery as an example to address these issues, and it is argued that the pottery style as a specific temporal and geographical unit is once broken up, and its constituent parts (*Type*) are reorganized into homogeneous temporal and spatial frames.